

# 戦姫絶唱シンフォギア～指輪物語～

温野菜生活

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつてとある王が神より授かった指輪。

これはそんな指輪を手にした少女が戦い抜く話。

この話には原作にない聖遺物が登場します。

設定はこちらで独自の解釈、改変などをして いますので、詳しい方は温かい目で見ていただければ幸いです。

目  
次

プロローグ	
指輪の真実	
旋律が響きあつた日	
陰る未来、照らす旋律	
王の再誕	
特異災害対策機動部二課	
自由のための決意	
現在地	
	58
	50
	42
	33
	24
	14
	8
	1

# プロローグ

唐突だが、アタシ沢渡旋さわたりめぐりは不良と呼ばれている。いや女だからこの場合は“スケ番”というべきか。

アタシ自身も不良と呼ばれること自体は否定はしていない。事実、街では不良相手に喧嘩をしているからだ。

だが一つだけ言わせてもらうと、別にアタシはしたくて喧嘩をしているわけじゃない。あちらから絡んでくるのでそれを返り討ちにしているだけだ。自分から殴りに行つたことなど……ほんの数回を除けばない。

そのほんの数回も中学で起きた“あるイジメ”を成敗しただけで、あれをアタシは別に悪いと思ったことはない。むしろそういう陰湿なことをしてた奴らが悪い。

さらに授業もサボるなんてことはなく、校則だつて大体は守つている。破るとしても制服を着崩すくらいの小さなことで、これくらいで不良と呼ばれるのなら今頃、日本の学校は不良にまみれているだろう。

ただ失礼なことに『目つきが悪い』とか『雰囲気が鋭い』とか『近寄り難い』とか、そんなことまでも理由にしてくる奴らもいる。アタシからしてみれば身体的特徴を否定されているのとほぼ同義だ、正直たまつたものではない。こちらだつて好きで目つきが鋭いわけではない。生まれつきこうなのだ。それに雰囲気が鋭いとか近寄りづらいとかはあちらの感じ方次第なので、こちらからは手の打ちようがない。

とはいえ喧嘩をしているのも校則を破っているのも事実。なので他人が不良だというのなら、アタシは不良なのだろう。

そんなアタシには当然、友人というものがいるはずもなく、地元から離れた高校へ進学した今でも持ち前の人当たりの悪さが遺憾無く発揮され、その類の関係は皆無といつてもいい。

ようはぼつち、というやつだ。

だがそんなアタシにでも関わろうとしてくる数少ない友人変人がいる。

「めつぐりちゃん！」

どこからか聞こえてくるアホさが滲み出た声。その声がする方へ振り返れば、手を振りながら駆け寄つてくる一人の女子の姿が。薄い橙色をした髪は襟足が広がったボブカットで、左右の揉み上げのこめかみ部分に髪留めをしたその女は、アタシの元へ辿り着くやいなや両腕を広げ

「おっはよう！ 今日もいい天気だね～！」

両脚に力を入れダイブ。標的をアタシに定め飛び込んでくる。喧嘩で動体視力は鍛えられており、避けること 자체は簡単なのだがそのせいで怪我をされても困る。

なるべく勢いを殺しその体を受け止めるが、やはり人一人を受け止めるとなるとそれなりに衝撃が走る。だがそれと同時に彼女の持つ豊満な胸がぶつかり、むにゅん、と形を変えた。やつぱりこいつの胸、いつ見てもでかいな。

「元気のはいいがあんまり勢いつけすぎるな。アタシじゃなかつたら受け止められねえぞ」

「あははー、だつて旋ちやんを見かけちやつただもん、そりや抱きつきもしますとも！」

「犬か、お前は」

いや、犬だな。腕の中で笑顔を浮かべる彼女の頭には犬耳が、そしてそのくびれた腰の下には犬の尻尾が幻視できる。それも高速でフリフリしていやがる。

この犬つ子の名前は立花響。たちばなひびきアタシとこうして話そうとしてくる数少ない友人だ。

「ちよつと響、急に走り出さないでよー！」

すると立花に遅れてこちらへ駆け寄つてくるのは、後頭部を白いリボンで結んだ黒髪ショートの女生徒。

「……おはよう、沢渡さん」

「ああ……おはよ」

着くやいなや、アタシの腕の中で笑顔を浮かべる立花を見て、むつ、とした表情を浮かべる。だがちゃんと挨拶をするところに人の良さ

が窺い知れる。

こいつの名前は小日向未来。<sup>こひなたみく</sup>立花とは小学生の頃からの付き合い  
で所謂”幼馴染”というやつらしい。

「ちょっと響、いつまで抱きついてるの！ 泽渡さんが困つてゐるで  
しょ！」

「うわわっ、引つ張らないで～！」

小日向は立花を後ろから羽交い締めにし、強引にアタシから引き剥  
がす。アタシとしては抱きつかれていても別に困りはしないが、引き  
剥がしてくれるのならそれはそれでよいので特に引留めはしない。

しかしながら小日向、引き剥がすのはいいとして少し羽交い締めが  
長すぎじやないか？ あとなんかちょっと自慢げのはなんでだ？

小日向は普段は常識人なのだが、時々こうして不思議な行動をとる  
ことがある。まあアタシとしては、人間誰しでも一つや二つ何か隠し  
事があるもんだと思うし、小日向もそうなんだろうと思つて いる。

と、そんなことを考へてゐる間に予鈴が鳴つてしまつた。このまま  
ここでおしゃべりというのもいいが、それではこの二人も説教に巻き  
込まれてしまう。

「抱き合うのもいいが急げよ。じゃねえと遅刻しちまうぞ」

アタシの一言に小日向は顔を赤くさせ立花から離れる。本当に、た  
いへん仲がよろしいことで。

さて、今日も退屈な1日が始まるのだが

「あーっ、旋ちやんが先に行つちやう！ 未来、早く追いかけるよ！」

「ちょっと、また急に走つて……響！」

……どうやら退屈<sup>それ</sup>がアタシの前に現れるのはまだまだ先らしい。

退屈な授業も終わり、ようやく学校から解放されたアタシは足早に  
教室をあとにする。いつもならここで立花が帰らせまいと立ちはだ  
かるのだが、生憎とやつは今授業で居眠りを決めていた罰で反省文を  
書かされている。さすがにこれではアタシに構う余裕などないだろ  
う。

「ああ、旋ちゃんが帰つちやうよー！」

「ほら、余所見してたら終わんないよ。ちゃんと集中して」「うう……未来の鬼い」

「響の自業自得でしょ」

そんな立花に付き合う小日向には毎度感服させられる。面倒見が良いと言つても限度があるだろう。これも幼馴染という関係がなさせる技なのだろうか。

「あんまり小日向に迷惑かけるなよ……じやあな」

「旋ちゃん、また明日～！」

「……また明日」

さて、帰りに夜食でも買つて帰るか。

「はい、こちら目的地周辺。あと30分後にそちらへ到着します」

町のなかを移動する黒い車。その中は黒いスーツに身を包みサングラスをかけた屈強な男たちが占拠し、その内一人が通信機器で誰かと会話をしている。そんな男の元には厳重に保管されたスーツケースが。

「はい……では例の場所で」

そう言い男は通信を終える。しかし彼らは目的地へと到着することはなかつた。

なぜなら彼らの向かうその途中には“災害”が待ち構えていたのだから。

帰宅途中、夜食を買うためにコンビニに立ち寄ったアタシだつたが  
「ごめんねお嬢ちゃん。荷物を運んでもらつて」

「たまたまだ、たまたま見かけただけ……礼なんていいよ」「こんなものしかなくて悪いけど、帰りながら食べな」

途中で見かけた荷物を運ぶのに苦労している婆さんに手を貸し、現在はその婆さんの家の前にいる。別れ際お礼に饅頭を手渡され、自宅である寮への帰り道にそれを頬張る。

しかしだいぶ道を外れてしまつたが、まあ仕方ないことだ。それにこうしてお礼に饅頭ももらえたことだし十分だろう。

柄ではないとわかつてゐるが、アタシだつていいことをすると気分がよくなるんだ。悪いか。

「とはいえ……これはちょっと困つたな」

右へ左へと、しばらく歩きまわつたところである異変に気付く。それはいつもの帰り道にたどり着かないということだ。つまり、言ったくはないが……道に迷つた。

婆さんと話していく道を覚えなかつたのが災いしたか、周りの建物はどれも見慣れないものばかり。仕方なし、スマホを開き地図アプリを起動。寮の住所を入れ検索すると……やはりいつもの帰り道からかなり外れていた。

「このままいつもの道で行くと時間がかかるな……ならこつちの道から行くか」

多少入り組んだ道を行くことになるが、ここからいつもの道に戻るよりも断然早く着ける。そうと決まれば話は早い、アタシはスマホの指示に従いながら未知なる道へと足を進めた。

——この先に、地獄の痕が残つているとも知らずに。

「えーと、どれどれ……次はこの通路を左つと」

入り組んだ路地裏の角をいくつも曲がりながら進むこと10分。地図によればこの角を曲がれば広い道へ出ることができるらしい。

そうして角を曲がると、地図通り広い大通りへとたどり着く。ここからしばらく道なりに進めばいつもの帰り道に合流できるので、スマホを閉じポケットへしまう。

そして再度通りへと目を向けたあと、アタシはこの大通りにある違和感を覚えた。

「……人が少ない」

いや、人はおろか車も通っていない。これだけの大通りだ、全くの無人というのほんは些か怪しすぎる。

目の前の光景に疑問を浮かべていると突如、通りの向こう側で爆発が起きた。何事かと思い向かうと、そこには炎に包まれた何かが黒煙を上げていた。

さらには周囲の建物も破損しており、道路には亀裂が走っている。それはまるで何かしらの災害が起こった痕のようである。

「なん、だ……これ」

目の前で起こる現実に目を奪われ、呆然と言葉を漏らす。そして道に残つたあるものを見つけて、この大惨事をもたらしたもののが何なのかを理解する。

通りの所々にあつたもの……それは“煤”。爆発で出来上がったにしては量の多いそれは、ある“災害”が起こった形跡とぴたり一致する。

「……ノイズ」

“認定特異災害ノイズ”……それがこの惨劇を生み出した正体だ。アタシも実際に目にしたことはないが、ノイズは触れた人間を炭素と変え最終的には“煤”として散らせる“人を殺す災害”。

2年前、とある歌手のライブ会場で多くの命を奪つた事件は記憶に新しい。そしてその事件がアタシとあいつが関わる切つ掛けにもなつた。

と、昔の話を思い返すのは今することではない。見ればノイズの襲撃は終わつたと見ていいだろうが、万が一のことがある。足早にこの場を離れるのが得策だろう。

そしてアタシがこの場を離れようとした時、後ろから何台もの車がやつてくるのが見えた。恐らくは警察か何かだろうが、面倒ごとに巻き込まれるのはごめんだ。すぐに通りの影へと身を隠す。

どうやら予想は的中。ゾロゾロとやってきた車からはいかにもな格好をした連中が姿を現し周辺の捜査を始めた。

……そのうちここにも捜査の手が回る。その前にさつさとここから離れるか。

そして一步、足を後ろに動かすと何かブロックのようなものにぶつかる。目を向けるとそこには黒色のスチックケースのようなものが転がっていた。ケースは壊れており所々にビビが入り、アタシが軽く触れると

「……やつべ」

いとも簡単にバラバラに壊れてしまった。まさか触れただけで壊れるとは思つてもおらずどうしようか考えていると、ケースの残骸の中に一点、金色に光るものがあつた。

手に取るとそれは小さな金色の指輪で、表面には何やら文字のようなものが書かれてるが……だめだ、まったくわからない。

「……では私はこちらを調べてきます」

「つと、誰かきやがつた……さつきと逃げるか」

するとこの場所にも連中の手が回り、アタシは見つかる前にその場を後にする。

この時、逃げるのに夢中で指輪を持つていたことを忘れていたわけだが、これがまさかあんな事態を招くことになるとは……この時のアタシは思つてもいなかつた。

まさかこの指輪が“聖遺物”と呼ばれるもので、それがアタシをあら戦いの渦中に巻き込むなどとは……。

## 指輪の真実

あれから元の道を引き返し別の道から寮へと引き返した。時間は30分ほどかかってしまったが、まあ面倒ごとに巻き込まれるよりかはマシだろう。

自室へと戻り、歩き疲れた体を癒すためにベッドへと横たわる。

「はあ疲れた……」

まさかノイズの襲撃後の現場に出くわすとは思つてもみなかつた。まだ襲撃中じやなかつただけ運がいい……とは思うが、嫌なもんを見ちまつたな。

「つい持つて帰つて来ちまつたけど、この指輪いつたいなんなんだ?」制服のポケットから取り出したのは、あの現場で見つけた金の指輪。ぱつと見では普通の指輪なんだが……どつかの遺跡から発掘された貴重品なんだろうか。

光に当てるときらりと輝く。にしても、見れば見るほど綺麗な指輪だな。

やつぱどつかの国宝……だつたりするんだろうか。だとしたらアタシ、結構やばいことしてる?

「いやいやいや、大丈夫だよな……うん大丈夫、問題はない」

まあ持ち帰つちまつたもんはしようがない。もしも本当にお宝だつたら……よしつ記念に指に嵌めてみるか。

指輪を右手の中指に嵌めると、意外にサイズはアタシの指にぴったりだつた。

「……まあ指輪だしな。嵌めた所で何かあるわけでもねえよな」

さて、そろそろ外すか……ん?

「おいおいおい……冗談だろ」

指輪を持ち、指先の方へと動かすが一向に前に進もうとしない。

指輪、完全に指にはまつちまつた……。

それから何度も指輪を外そうと試みるが、やはり定位置からピクリとも動こうとしない。数分後、アタシは指輪を外すのを諦め、ベッドに体を預けるように横たわる。

おかしい、嵌めた感じでは全くキツくはなかつたなに……。なんでこうぴつたり嵌まつて抜けないんだ……？

「はあ……まあ今はあれこれ考えても仕方ないか……とりあえず寝よう」

今いくら考えたところでどうせ解決できるわけでもない。アタシは思考を放棄し、瞼を下ろすと眠りにつく。

どうか目が覚めたら外れるようになつてほしいもんだ。

「風鳴指令、ノイズの襲撃現場の調査完了しました」

「……そ、それで緒川、例のものは見つかつたか？」

「申し訳ありません、例のものは見つかりませんでした」

ノイズの襲撃跡地にて二人の男が会話をしていた。一人は胸ポケットにネクタイの先端を入れた筋骨隆々な男、そしてもう一人はスーツ姿の優男風な男性。

風鳴と呼ばれた男は緒川という男の報告を聞き表情を険しくさせる。

「完全聖遺物……まさかそれを輸送している車がノイズに襲撃されることは」

「ああ……何にしても早急に行方を探し出さなくてはな……」

二人はことの深刻さに顔をしかめ、その後調査へと戻る。

だが彼らは知らない。その完全聖遺物を手にしたのが、一人の女子高生であるということを。

——そしてその少女を、いや少女が持つ指輪を狙う者がいることを。

その日、アタシは夢を見た。

夢の中では、この世のどこでもない景色が広がつており。その中に

二人、肩を並べて空を見上げる男の姿があつた。

一人は白い魔導師のようなローブを身に纏った青年で、もう一人は対照的に黒で染め上げた服を纏った男性。

『王よ、あなたは我々を使役しいつたい何を得ようとしているのですか?』

ポツリ、黒い男が問う。

『何を、とはなんだい?』

白い青年は微笑み、そう問い合わせ返す。

『貴方は富も地位も叡智も……この世の全てを手にした。これ以上に何を求めるというのです?』

男の声からはどこか不安が感じ取れた。

『青年はそんな男を安心させるように、笑みを絶やさず

『???、僕は全てを手にしたわけじゃないよ。どれだけ叡智を得ようとわからないことがある……でも同時に、それが僕が求めるものでもあつたんだ』

おそらく男の名前であろう言葉はノイズでかき消されてよくは聞こえない。

『では王よ、貴方の叡智を持つてしてもわからぬものとはなんですか? 貴方が求めるものとは……いったいなんなのですか?』

『???、そんな男の問いに、青年は視線を頭上に広がる蒼穹へと送り

『???、僕はね——』

「……なんだ、今の夢……」

本当に夢なのか。夢にしてはどこかリアルすぎるし、何よりもはつきりと内容を覚えている。

「……てが、長い事寝ていたんだな。もう外真つ暗じやねえか」

時計を見れば午後7時を回つており、外がこれだけ暗くなっているのにも納得がいく。

とりあえず喉が渴いていたので冷蔵庫へと向かい、ペットボトルのお茶を飲み干し渴きを潤す。その時、偶然視界に例の金の指輪が入り込む。

この指輪まだ外れねえのかな……あ、ダメだ。寝るまえと同じでびくりともしない指輪。

「もしかしてこの指輪、呪いのアイテムとかなにかか……？」

『いいえ、この指輪は呪いの指輪ではなく”神の指輪”です』

「——おわつ!!？ だ、誰だ!!？」

いきなり聞こえてきた声に驚き部屋中を見回す。だがどこにも人の姿は見えず、とりあえず警戒をマックスにし視線を動かしながら周りを見ていると

『周りを見ても意味などありませんよ。今私はあなたの頭に直接語りかけているのですから』

「直接つて……どこのファンタジーだよ」

『まずは自己紹介を……我が名は”ゴエティア”。この”ソロモンの指輪”に宿り、72の魔人を管理する者です』

ゴエティア、声の主は自らをそう名乗る。

だがこちらからしてみればその自己紹介はさらに謎を深めるだけで、事の解決には一歩たりとも近づいてなどいなかつた。

『までまで、いきなり自己紹介されてもわけわかんねえって!……もしかしてまだ夢の中か?』

そうだ、冷静に考えればこんなのがりえるはずがない。確かに夢の中で起きることがあるっていう話を聞いた事がある、おそらくこれもういう類のやつだろう。

『残念ながら夢ではありませんよ。正真正銘、現実です』

「おいおい、今それを言うなよ……。てか、もしかして心の中読んでやがるのか?』

『送れるという事は受信もできるという事です』

『送受信可つてわけね。まあいい、別に読まれて困る事なんてなにもねえしな。それよりも早く話の続きを聞かせてもらおうか。』

「まずはこの指輪について聞きたいんだが、もちろん説明できるよな

？」

『ええ……その指輪はかつてソロモン王が神より賜った指輪。その力は72の魔人を使役し、持ち主に世を統べる力を与えます』

「魔人つて……やっぱ呪いの指輪じやねえか」

『それはあなたの意思次第です。呪いの指輪にするのか祝福の指輪にするのか……使い道一つでどちらにでも変貌します』

つまり勇者になるか魔王になるかはアタシ次第つて事か。まあ面倒くさいからどつちも嫌だけど。

「それで、72の魔人つてのは？」

『かつてソロモン王に忠誠を誓つた魔人達のことです。彼らの存在一つ一つが強力な力を有しており、ソロモン王の僕しもべとして力を貸してきました』

「はあー……すげえなそのソロモンつてやつ」

『はい……とても素晴らしい王でした』

まあこの指輪が何なのかとか、その魔人つてのがどういうのなのかも理解できた。それにこの指輪の元々の持ち主のことも。

そしてごくごく普通の高校生活を送つているアタシにはすぎた力だつてことも……。

「まあこの指輪がどういうものかってのはわかつたよ……夢じやないつてことも。つまりアタシが願えばその魔人とやらの力を扱えるつてわけだろ？」

『その通りでござります』

「でもよ……その魔人がアタシの命令に従うつて確証はあるのか？」

話の中で浮かび上がつた疑問。この指輪の魔人達はその“ソロモン王”とやらに忠誠を誓つたと言つていた。だからその王様には力を貸すということはわかる。

しかしそれはソロモン王だからという話で、もしアタシが指輪を使い命令したとして……本当に魔人達は命令を聞いてくれるのだろうか。こんな一般人の言うことなんかを。

『確かに確証はありません……しかし方法ならばあります』

「方法だと……？」

『ええ、簡単な話あなたに力を貸していいと思わせれば良いのです』  
さも当然と言わんばかりの口調で語るゴエティア。

しかしこの話がすべて本当のことだとしたら、相手は魔人と呼ばれる存在だ。そう簡単にことが運ぶわけなどあり得ない。

『その辺りは安心を、私が比較的友好な魔人に声をかけますので』  
「おいちよつと待てつ、なに勝手に話進めてんだ！ 第一アタシは一  
言もそんな力が欲しいなんて――』

『それでは、こちらで話がついた後にまた声をおかけします』

「――テメエまだ話は……おいつ！」

…………ダメだ、完全に途切れやがった。あの野郎、自分の言いた  
いことだけ言いやがって……。

うんともすんとも反応しない、というかこちらからどうやつて連絡  
を取ればいいのかもわからず打つ手なしの状況。

あいつは話がついたらとか言つてた以上、また現れるのは確実。そ  
の時にアタシはその72の魔人とやらの内の一体と話をしなくちゃ  
いけないのか……。

「……まあいい、どうせ上手くいくわけねえし、適当に流してこの指輪  
外してもらうよう説得するか」

兎にも角にも、次にあいつと話をするまでは指輪はこのまま嵌めて  
おかなければならぬ。教師になんて言われるか分かつたもんじや  
ないが……まあ説教くらいで済むだろ。

状況は確実に悪い方へと向かってはいるが、なんとかなるかとアタ  
シは再びベッドへ横たわり眠りについた。いろいろわけのわからな  
いことがあって精神的に疲れたからか、アタシは予想以上に早く眠り  
につくことができた。

…………本当に、夢でありますように……。

## 旋律が響きあつた日

これは私と彼女の出会いの話。

私、立花響は昔イジメを受けていた。

学校へ行き下駄箱を開けば上履きに何かが詰められていたり、教室に向かえば机に落書きなんて当たり前。トイレに行けば上からバケツで水を被せられたりもしたし、ひどい時にはお母さんの作ってくれたお弁当がぐちやぐちやにされていたこともあった。

イジメは家に帰つてからも続き、自宅の壁には『人殺し』とペンキで書かれいくつもの誹謗中傷が書かれた張り紙が貼られていた。時には窓ガラスを破つて石を投げ入れる人もいて、私もお母さんもお婆ちゃんも不安に押し潰されそうな日々を送つていた。

私がイジメにあう切っ掛けとなつたのが、『ツヴァイウイング』という人気アーティスのコンサートで起きたノイズの襲撃だ。コンサートには10万人もの人が居合わせており死者、行方不明者の数は1万2874人にものぼる大惨事となつた。

しかしそのうちノイズの被害にあつたのは3分の1程度であり、残りは逃走中の将棋倒しによる圧死や逃走ルート確保の争いによるものがほとんどだつた。そのことが週刊誌に掲載されたことで、世間の人々の私を含めた事件の線損者たちに向ける目が変わり——私の生活はそこから一変、前述したイジメが始まつた。

正直に言うと辛く苦しい日々の連続だつた。ついこの間まで友達だつたはずの人も私へ侮蔑の視線を向け、一緒にいて欲しかつたお父さんも家を出て行き姿をくらませた。エスカレートしていくイジメに対しても先生たちは見て見ぬ振りをし、ついには私という存在は“いないもの”として扱われるようになつていつた。

家でも学校でも降りかかる理不尽。そんな凄惨な日常にさらされながらも、それでもこうして生きてこられたのは私の中にある二つの言葉の存在があつたから。

——生きるのを諦めるな

——へいき、へつちやら

この二つの言葉があつたから、私は理不尽に押しつぶされることなく生きてこれたんだと思う。

そして何よりも、そんな私のそばに居続けてくれた『幼馴染』<sup>ひだまり</sup>が、未来の存在が私の心を支えてくれていた。

そんな言葉や親友の支えを得て、日々をなんとか送っていた私だったけど——ある同級生との出会いが私の生活に変化をもたらした。

それはいつものように、校舎の裏で一人昼食を食べていた時のことだつた。

人の手で乱暴に破かれたお弁当の包みを解き蓋を開ける。中はひっくり返されたかのようにぐちやぐちやになつており、卵焼きに至つてはスクランブルエッグと見間違うほどに形が崩れてしまつていた。

せつからく作つてくれたお母さんに申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら手を合わせ、そして元卵焼きへと箸を伸ばそうとした時

「うおあああああ！」

「わあつ！？」

突如、私の目の前に立つっていた木から一人の女生徒が落ちてきた。一人だとたかを括つていた私は、予想もしない出来事に思わず大声をあげてしまう。

いつたいなんで木の上に、という私の疑問は声に出ることはないうが、しかしすぐにその疑問は解決する。

「いつてく……くそ、助けてやつたのに暴れんじやねえよ」

「フシャーッ！」

「いでででっ！ わかつたから引っ搔くなつて！」

彼女の腕の中には一匹の猫が抱かれており、木の上にいたのはその猫を助けるためなのかと納得する。

「おら、どこにでも好きなところに行きな」

そう言い彼女が猫を地面に降ろしてあげると、猫は一瞥すらするごとなくすぐに茂みの中へと姿を消してしまった。

「つたく、頭ぐらい下げるっての……つつても猫には無理か」

ボリボリと頭を搔きながら一人呟く女の子。後ろ姿しか見えないが腰あたりまで伸びた髪は綺麗な茶色で、背も多分170くらいあるんじやないかというほど大きい。

「さて、アタシもそろそろ飯に……ん？」

「あっ……」

突然の出来事の連続に思わず見入ってしまった私。そんな私の存在に気づいた彼女は私の方へと顔を向け、綺麗な髪はその軌跡を辿るように宙を舞う。

移動しなきや、そう考えた時にはもう遅い。視線が重なり……そして私は彼女に目を奪われた。

整った顔につり上がった目元。鼻も高く、『可愛い』というよりも『綺麗』と思わせる顔立ち。さらにはスレンダーな体つきが『綺麗』を『かっこいい』へと昇華させ、同性であるとわかつていながらも思わず見惚れてしまった。

「……お前、どつかで見たことあるな」

「あっ、いや、その……」

言葉をかけられ我に帰る私。どうしよう、学校の人には話しかけられたのは久しぶりだから、どう返せばいいのかうまく言葉が見つからない。

それに驚きもあった。ある意味有名人であるという自覚のある私だけど、目の前の女の子は私のことを知らないのか、鋭い目をさらに鋭利にさせながら近づいてくる。

どんどんと埋められる距離に比例して、私の胸に募る不安も増していった。もしもここでバレてしまえば、きっと彼女も私に罵声を浴びせてくる。そんな考えが浮かんだ時には、私はお弁当を放り出してその場を駆け出していた。

後ろで私を呼ぶ声が聞こえてくるけれど、そんなのお構いなしに走りゴミ収集所の影へ身を潜めようとした時。

「うお!!?」

「きやつ!!?」

建物の影から出てきた男子生徒にぶつかり、勢いよくぶつかつたこ

とで互いに尻餅をつく。彼は私を視界に入れると、忌々しそうに舌打ちをする。

「おーいどうした?」

「つてあれ? 誰かと思えば人殺しの立花じやん」

すると彼の友人であろう男子使徒が一人、建物の影から現れる。彼らは私を見るなり“いい獲物”を見つけたと言わんばかりに笑みを浮かべ

「おいおい、人殺しがこんなところで何やつてんだよ」

「決まつてんだろ、物陰に隠れて誰か襲おうとしたんだよ」

心にもない言葉を吐かれ、ズキリと胸が痛む。

「その……ぶつかってごめんなさい」

私はすぐに立ち上がり、ぶつかった男子生徒に謝ると踵を返しその場を後にする。しかし彼らはそんな私の肩を掴み、グイ、と強引に体の向きを変えさせた。

「ごめんなさい、じゃねえだろ。こつちは痛い目見させられてんだよ、ちゃんと責任これや!」

「でも私……」

「加害者が口ごたえしてんじゃねえよ!」

「きやあつり?」

怒声とともに今度は肩をど突かれ再び地面に尻餅をつく。そんな私を彼らは即座に囲み、ニヤニヤと笑みを浮かべながら見下ろしていく。

「おい、こいつどうする?」

「人殺しがこれ以上悪さしないよう、俺たちで成敗してやろうぜ」

「よつしや、それじゃあせいぎのみかたその1いきまーす!」

そして三人のうち一人が足を引き、私は次に来る衝撃を耐えるため必死に目を閉じる。

なんでこうなつてるんだろう……。あの事故で大怪我を負って、一生懸命リハビリをして……そうすればみんなは笑つて迎えてくれると思つたのに……。

なんで、なんで……!

「そこまでにしどけ、馬鹿野郎共」

「ギャツ!!?」

「ゲブツ!!?」

「ギウ!!?」

すると女の人の声が聞こえたかと思うと、すぐ後に私を囮んでいた男子生徒の悲鳴にも似た声があがる。すると私の二の腕をその誰かが掴み、グイ、と引っ張りあげられる。

目を瞑っていた私は突然のことに対応しきれず、その誰かの胸に倒れこむような形で抱きついてしまう。するとその誰かは抱きとめるように私の背中に片腕を回し

「ほら、もう目開けていいぞ」

柔らかい、安心させるような声で囁いた。そして恐る恐る、私がそつと目を開き顔を上げると

「あ……」

「よう、さつきぶりだな」

私の視界いっぱいに、口元を釣り上げるだけの笑みを浮かべる猫を助けた女子生徒の顔が映る。

「なんで……」

「なんでって……お前、弁当忘れていつてたぞ？」

呆れたような顔を浮かべもう片方の腕をあげる彼女の手には弁当の包みが。わざわざこれを届けるために追いかけてくれたのだろう、彼女の頬にはわずかに汗が滲み、胸から伝わる動悸はやや速くなっている。

彼女の体から離れ、お礼を言い弁当の包みを受け取る。

「親が作ってくれた弁当だろ……もう忘れんじゃねえぞ」

「は、はい……」

そしてぽんぽん、と軽く頭を叩かれる。そんな彼女の行為に胸が温かくなり、その熱が顔まで伝わるのがわかつた。

すると気絶をしていたらしい三人のうち一人が目を覚ます。

「うう……」

「……なんだ、やつと起きたのか。女相手に三人がかりだし、いろいろ

とダラしねー奴らだな」

「くそ、邪魔しやが……て……」

最初は怒りで語気が強かつたその男子生徒だったが、私の隣に立つ彼女の姿を視界に入れるなり急速に顔を青ざめさせる。見れば体も震えており、彼は震える右腕で彼女を指差すと、同じく震えた声での名を口にする。

「さ、沢渡旋……何でお前がここに……」

「なんでって、アタシが学校のどこにいようと勝手だろ。それとも何だ、いちいちお前の許可取らねーといけねえのか？」

「ひいっ！」

彼女の一言にさらに縮み上がる男子生徒。そして私も隣の少女へ驚愕の瞳を向ける。

沢渡旋、その名前は私でも聞いたことがある巷で有名になっている不良の名前だ。なんでも今まで返り討ちにしてきた不良の数は計り知れず、女の身でありながら常勝不敗の実力を持つという伝説のスケ番。

私の学校にいるとは知っていたけれど、まさか彼女がその沢渡旋だとは思いもしなかった。

彼女——沢渡さんは面倒くさそうに頭を搔き、未だのびている男子生徒を見下ろすと

「このままお前らと話しても時間の無駄だ。さつさとそいつら連れて教室帰れ」

「は、はいっ！」

沢渡さんの言葉に彼はのびた二人を抱え、信じられない速度で校舎内へと姿を消した。

「さて、用事も済んだし昼飯でも食べるか」

弁当箱を渡すという用事を終えた彼女は近くの木まで移動し腰を下ろす。そしてビニール袋からパンを取り出すと、包装を開けむしやむしやと食べ始める。

ただ木陰に座つて食べているだけだというのに、なぜかその姿に見

惚れてしまう。そんな私の視線に気づいた沢渡さんと視線が合い、思わずそらしてしまう。

なぜだろうか、上手く視線を合わせることができない。ここ最近、まともに人と話していない影響なのだろうか？

「……一緒に食うか？」

「え……」

「まあアタシと一緒にいたら色々変な誤解受けるだろうから、別に無理してとは言わないけど」

そう言うと、沢渡さんは再び食事を続ける。

一緒に食べよう、もう長い間言われてこなかつた言葉だ。きっと沢渡さんは私のことを知らないから言つてくれたんだろうけど、それで も……

「……うえ……うああああ……」

「つておい、なに泣いてんだよ!?」……そんなに嫌だつたのか

「うう……ちがつ……ひぐつ、うれしつ……えぐつ……くて……」

その日、私は初めて涙を流した。

しかしそれは悲しみからくるものではなく、ただ純粋な喜びからくるものだつた。

これが私、立花響と沢渡旋との出会いの話。生涯忘れられないであります、私の大切な思い出。

そして時間は現在。

「うわわわっ、遅行しちゃうー！ 未来、なんで起こしてくれなかつたのー！」

「響があと5分を5回も続けるからでしょー！」

「お布団が気持ちいいのが悪い！ あれは眠りに誘う魔性の道具だよ！」

私は未来と寮から学校へ続く道をひたすらに走っている。二度寝

ならぬ五度寝をしてしまつた私だが後悔はない！　だつてすつごく気持ちよかつたんだもん！

全力で走つたおかげで予鈴の五分前には校門にたどり着くことができた。

「いやー朝から運動するのは気持ちがいいね」

「もう、調子のいいことばつかり言つて！　今度からはちゃんと二度寝ですませてよ」

注意はするけれど、そうやつて二度寝までは許してくれる未来つてやつぱり優しいなー！

そんな優しい未来と話しながら歩いていると、少し先に見慣れた後ろ姿を見つける。

「めつぐりちゃん！　おつはよー！」

「ちよつと響、急に走らないでよ！」

学校まで走つてきたけどそんなのお構いなし！　私は旋ちゃんの元までダツシユで駆け寄り、振り返る彼女の胸の中へダイブする。「つと……昨日も言つただろ。勢いつけて抱きつかなつて」

そう言いつつも旋ちゃんは毎度毎度受け止めてくれるから大好きだよー。毎朝のルーティーンである旋ちゃんへの抱きつきを行つていると、不意に彼女の右手に違和感を覚える。

見ればその中指には昨日まではなかつた金色の指輪がはめられていた。

「およ？　旋ちゃん、その綺麗な指輪はなに？」

「ああこれか……まあ……ファッションド」

目を逸らしながらそう答える旋ちゃんだけど、私にはわかる。これは絶対にファッショントの類じやない！　だとしたらまさか……彼氏！？　旋ちゃん、もしかして誰かとお付き合いしてる！？

……こ、これは真相を問い合わせねば。まずは落ち着いて、落ち着いて……。

「ま、ままま、まさか旋ちゃん……か、かかか……彼氏からのプレゼント……？」

つて、あれえ！？　なんでこんな噛み噛みになつてるの！？　全然

落ち着けてない！ 旋ちゃんもなんか呆れた顔しちゃってるし！

「違うって、本当にファッショングだから。それにアタシなんかと付き合う物好きはそうそういうねえよ」

「な、なんだよかつた！」

「よかつたって……お前失礼な奴だな」

うわわわわ、旋ちゃんがなんか誤解してる！ なんとかして誤解を解かないと……。

「よかつたっていうのはそうじやなくて！ 確かに旋ちゃんは目つき鋭いし見た目怖いしで近寄りづらいって思われただけど……ちゃんと好きって言つてくれる人はいるから大丈夫！ 安心して！」

「……これ怒つていいやつか？ 多分怒つていいやつだよな、小日向」

「そうだね、怒つてもいいと思うよ沢渡さん」

つて未来、いつのまに後ろに……つて、違う違う！ また旋ちゃんが誤解してる！ そして旋ちゃん、その私に向けて伸ばしている右腕はなに!?

ゆっくりと迫る旋ちゃんの右手。そしてその手が私の頭へ向かいアイアンクローナーをお見舞い……するのではなく、軽く触れるだけで終わつた。

見ればその手には一枚の葉っぱが握られており、旋ちゃんはそれをポイと投げ捨てる。そしてキヨトンとした表情を浮かべているであります私へ視線を移し

「なんだ、本当に怒つたと思つたのか？ 案外、可愛いところあんだな」「ふえ……!?」

そう言うと旋ちゃんはフツと笑みを浮かべ、右手を私の頭の上に置く。

……なんでだろう、風邪もひいてないのに顔が熱い。それになんか、心臓がドキドキしてる……おかしいな今日は朝から元気だったのに。

「さてそろそろ教室に行かねーと遅れるぞ」

「あ……うん」

離れる右手。頭の上の熱がなくなり、少し寂しい気持ちが湧いてくる

る。

先に校舎へと向かう旋ちゃんの背中をぼーっと見つめていると  
「むく……私たちも行くよ、響！」

「わわつ!!? 未来、急に引っ張らないでー！」

ちよつと不機嫌そうに頬を膨らませた未来が私の手を取って歩き  
出す。急に手を引かれバランスを崩すも、その視線だけはずっと、あ  
の背中を追いかけていた。

## 陰る未来、照らす旋律

夜の闇を塗り潰さんとする業火。その中心に立つのはアタシこと沢渡旋で、目の前の光景に自分でもわかるほどに目を見開いている。

「アタシが、やつたのか……？」

そう、この燃え盛る炎を生み出したのは他でもないこのアタシ自身。言わせてもらうが、断じてガソリンなどをまいて放火したわけではない。アタシがしたのはただ一言命じただけ、それだけだ。だとうのに目の前には火災現場よろしくな光景が広がっている。

「熱……つ!!?」

闇夜を照らす業火に目を奪われていると、不意に右手に走る熱に顔をしかめる。すぐに視線を右手へと落とすと、そこにはいつの間に握っていたのか金の装飾が施された一振りの短刀があり、業火の明かりを照り返していた。

『おめでとう、沢渡旋！ 今この瞬間、貴女は次なる王となつた！』  
半ば放心状態のアタシの頭にゴエティアの歓喜の声が響き渡つた。

時は、少し前に遡る。

それはいつも通り学校へ行き、いつも通り退屈な授業を受け、いつも通りな学院生活を送つたその帰り道のことだつた。

アタシがこのソロモン王の指輪を手にしてから早二日が経過したが、いまだにゴエティアというやつからの連絡はない。そして当然のごとく指輪は今もアタシの右手の中指にしつかりと嵌められており、一昨日はその件で教師からお叱りの言葉をいただいた。

だがあちらも指輪が外れないと知ると納得……いや納得のいかない表情をしていたが、外れないうちは黙認するということで落ち着いた。

てか、なんだつてアタシが怒られなきやいけねえのか……。アタシだつて外せるんだつたら今からでもはずしたいぐらいだつてのに、こ

の呪いの指輪め。

心の内でそんなことを思いながら一人、校門を潜り抜けると

「少し待つてもらつてもいいだらうか」

「……ん？」

背後から誰かに呼び止められ振り返る。するとそこにはサイドポニーニーが特徴的な長い青髪の女生徒が立っていた。

「アンタ確か3年の風鳴先輩、でしたよね」

「ああ」

アタシの言葉に短く返事をする風鳴先輩。彼女はこの学院で最も有名な人物といつてもいい生徒で、その正体は日本を代表するアーティストだ。ちなみに立花も彼女のファンらしく、何度かCDを貸してもらつたこともある。

そんな学院どころか日本中でも有名な彼女が、アタシみたいなどこにでもいる一般人に何の用があるのだろうか。

「それで、アタシになんか用ですか？ できるなら手短に終わらせてくれると嬉しいんですけど」

「ええ心配しないでもそのつもりよ。一つ、貴女に聞きたいことがありますの」

そう言うと風鳴先輩はアタシを、というよりも私の右腕を指差す。「先日、職員室で見かけて話を聞いたの。なんでもその指輪外れないそうね？」

「ん……ああこれっすか。まあそうですね、ぴつたりはまつちやつて……やっぱ目立ちますかね」

指輪のことを聞いてきたのは少し驚いたけれど、やはり学院を代表する身からしたらこうした校則違反は許せないんだろう。でもごめんなさい、これ外せないんですよ。

「いいえ、すごく綺麗な指輪だから気になつただけよ。……一応聞くけど、それはどこで手に入れたのかしら？」

「……なんだろう、先輩から向けられる視線がどこか鋭いんだが。「あーこれっすか……デパートの小物売り場で買つたやつですよ。だからサイズも合わなくてこんなざまになりましたけど」

ノイズの襲撃現場で拾いました、なんてこと馬鹿正直に言えるはずがない。取り合えずはこの場をしのぐために適当に嘘をつく。まあ嘘も方便つてやつだ。

「そう、デパートで……」

先輩は訝しむような聲音でそう呟き、さらにはどこか怪しむような視線を向けてくる。なぜ彼女がそんな反応をするのかわからないが、アタシの第六感が危険を告げすぐにこの場を離れると警鐘を鳴らす。「その、そろそろいいですか？」

「……ええ。悪かったわね、急に呼びとめたりして」

先輩は案外すんなりと話を終わらせてくれたので、アタシは不自然にならないよう足取りは早めずにその場を離れる。

遠ざかっていく沢渡の背中を見つめる私、風鳴翼<sup>つばさ</sup>。私が彼女の話しかけたのは他でもない、彼女の持つあの指輪を確かめるためだ。そして今回この目で確認してわかつた。あれは先日こちらに輸送される際、ノイズの襲撃によつて行方をくらませた完全聖遺物“ソロモンの指輪”だと。

沢渡は誤魔化してはいたが、資料に記載された情報とぴったり一致しているので間違はないだろう。取り合えず弦<sup>けんじゅう</sup>十郎叔父様に報告をして今後の指示を仰ぐとしよう。

しかし話には聞いていた通り、あの指輪は本当に外れないらしい……が、それはそれでおかしな話だ。あの完全聖遺物は起動もしないはず……なのに持ち主を定めたかのように彼女の指から離れないのはどうしてなのか。

謎は深まるばかりだが、まずは報告の方が先だろう。私は懐から通信機器を取り出し弦十郎叔父様へと連絡を入れる。

「翼です……はい、例の女生徒が身につけていた指輪で間違いありません。それで今後の指示を仰ぎたいのですが……はい……はい、わかれました。また後日コンタクトを取ります」

叔父様からの指示は「今日のところは待機だ」とのこと。私は通話

を終えた通信機を再び懐にしまい、踵を返し学院の方へと向かつて足を進めた。

しかしこの出会いからわずか数時間後、再び彼女と顔をあわせることになるとは、この時の私は思つてもいなかつた。

風鳴先輩から逃げるようく学院を離れた後、アタシは夕食の食材がないのを思い出し買い出しのためにスーパーを訪れている。アタシ自身、料理 자체は得意な方ではない……が、かといって漫画やアニメの登場人物の「ごとく暗黒物質<sup>ダークマター</sup>」を作るかのといつたらそうではない。要は普通、それだけだ。

買い物カゴを引つき、野菜コーナーや肉コーナーなどを彷徨<sup>うろつ</sup>き品定めをしていると

「沢渡さん……？」

不意に背後から声をかけられ振り返ると、そこにはアタシと同じく手に買い物カゴを引つ提げた小日向が立っていた。

しかしながら、どこか違和感が……ああ、そういうことか。

「よお小日向、見たとこお前も買い出しみたいだが……立花はどうした？」

「響なら小テストの補習で今頃ひーひー言つてる最中だと思うよ」

「あーそういうことか……納得した」

いつも小日向とセットでいる立花の姿がないのが違和感の原因だつた。しかしながら立花、ついこの間も居眠りで反省文を書かされたと思うんだが……あいつに反省の二文字はないのか？

「毎度毎度、お前も大変だな」

「まあね……でも、あれが響だから」

そう言い微笑む小日向の姿はまさに保護者そのもの。

「本当にお前らは仲がいいな。さすがは幼馴染つてとこか」

「……仲がいいのは沢渡さんも一緒でしょ」

「ん？ なんか言つたか？」

「ううん、なんでもない」

なんだか小日向はアタシに對して冷たいっていうか、少し壁を作つている印象がある。まあ無理して距離を縮めようとは思つてないので、小日向にとつて「これがアタシとの適切な距離感だというならそれでいい。

と、このままここで話し込んでいたら周りの客にも迷惑がかかるな。

「取り合えず買い物終わらせるか。このままじや邪魔になるだろうし」

「うん、そうだね」

「じゃあアタシはこっちに行くから……じゃあな」

そう言い、アタシは小日向に背を向けて歩き出す。

「待つて……一緒に見て回らない？」

「……え？」

すると意外にも、小日向の方からアタシを買い物に誘つてきたではないか。これにはさすがのアタシも驚きを隠しきれず、思わず振り返り「マジか」といつた表情を浮かべてしまう。そんなアタシの反応に小日向はジト目を向け「失礼な」と口ではなく雰囲気で告げてくる。申し訳ないとは思うが、それでもアタシからしてみれば予想外すぎる発言だつたのだから仕方がないだろう。

「嫌なら、嫌つて言っていいよ……」

そう言葉を口にする小日向の顔は、どこか陰つているようにも見える。

「そうだな、一緒に回るか」

「……うん！」

アタシがそう返すと、どこか安心したような表情を浮かべる小日向。

……つたく、んな顔されたら断るにも断れねえだろつて。まあ元から断るつもりは毛頭なかつたんだけど。

そうして小日向と買い物すること約20分。アタシたちは買い

物袋を手にしスーパーの自動ドアを潜り家路へとつく。

「その……ごめんね、袋持つてもらつて」

「気にすんな。小日向よりアタシの方が力があんだ、要は適材適所つてやつさ」

アタシの両手のうち片方を占領する買い物袋に視線を落とし、申し訳なさそうな声で礼を述べる小日向。一人で部屋を使つているアタシと違い、小日向は立花も含めた二人分の量を買わなければならぬ。必然、買うものはアタシよりも増える。

さすがにこの量を持たせるのは酷なので、男顔負けの力を持つと自負しているアタシが一部を受け持つたというわけだ。言つてて自分で悲しくなるが日頃の行いの所為だ、仕方がない。

そうしてアタシたちが二人並んで帰り道を歩いていると、不意に小日向が口を開く。

「私ね、沢渡さんに感謝してるんだ」

「なんだよ藪から棒に……それに感謝つて、アタシ小日向に何かしたか？」

「してくれたよ……だつて沢渡さん、あの頃の響を守つてくれたじゃない」

そう語る小日向の視線はどこか悲しげで、遠い場所を見つめているようである。

小日向の言うあの頃というのは、間違いなくイジメを受けていた中学生時代のことだろう。

「私は側で支えることしかできなかつた……響を守つてあげることができなかつた」

「んなことねえだろ。アタシは立花じやねえからわからないが、支えがいるつていうのは大きかつたと思うぜ？」

「でも私は響の親友で……なのにあの子に掛かる理不尽から守つてあげられなかつた……！ 動けなかつた……私はつ、そんな自分が許せなかつた……！」

親友だからこそ、イジメから守るべきだつた。けど実際に立花をイジメから守つたのは、親友でもなんでもない、赤の他人だつたアタシ

という存在。

マジヨリティとなつたイジメは捻じ曲がつた正義を掲げ対象を苦しめる。それが間違いとしても奴らは止まらない、なぜならそいつらには“他の奴らもやつている”という大きな後ろ盾があるからだ。そしてそれを正そうとする存在が現れれば、当然そいつらの矛先はその存在へも向けられる。それを恐れるのは人としては当然のことだ。小日向は何も悪いことはしていない……悪いのはそんな間違った正義を振るう奴らだ。

それでも小日向の心には自責の念が募り、彼女を内側から圧迫していた。立花にその思いを悟らせなかつたのは、偏にあいつに悲しい思いをして欲しくなかつたからだろう。

そして親友に隠してきたその思いをアタシに吐露したのは……きつと抱えることに限界がきたから。

「なあ小日向、なんでアタシが立花を守つたと思う？　今まで全く関係のなかつた、赤の他人同然の立花をよ

「え……なんで……？」

だとするなら、アタシに出来るのは少しでもその後悔を取り除いてやることだろう。

「答えは単純、『アタシが嫌だつた』から。捻じ曲がつた正義を抱えて寄つてたかつて一人をいじめる……それがムカついたからだ」確かにあの事件で大切な人を失つたものもいるだろう。現にサッカー部のキヤプテンと付き合つていた女生徒は、その事件で彼を失つた。その悲しみはアタシに推し量れるものでは到底ない……が、だからと言つて立花を責めるのはお門違いもいいところだ。

それに聞けば、立花も生死の境を彷徨つたつて話じゃねえか。だというのになぜ、そんなあいつを“人殺し”だと言えるのか。

「別にアタシは立花のためだとか思つちゃいねえよ。全部アタシの気分が悪くなるからやつたんだ」

そう語るアタシを見つめる小日向の瞳は、いつになく真剣なもので「アタシの行動は小日向みたいに優しさからくるものじやねえ。要はアタシが嫌だからやめさせた……ただのわがまま、自己中心つてやつ

だ

全部が全部そだつてわけじやないが……まあこのまま話を続けよう。それを言うとせつかくのセリフが台無しになるしな。

「それによ、立花を庇つて小日向にまで火の粉が飛んだら、それこそあいつが悲しむだろ？」

なんで立花が一人で飯を食つてたのか今ならわかる……きつと小日向を巻き込まないためだ。まつたく皮肉なもんだよな、互いが互いを思つてそれが自分を傷つけるなんてよ。

「お前は立花にとつて大切な居場所だ。それが傷ついてちや立花だつて安らげねえだろ。要は適材適所、アタシが守つて小日向が支える……どつちが重要だとか、最初からそんなもんねえんだよ」

「……本当に、それでいいのかな？ 私はただ待つてるだけで、良かつたのかな……」

「それが正しいかどうかなんて、今の立花を見ればわかるだろ」

今、あいつは笑つてゐる。それだけでも小日向が支えた意味はあるだろう。

「お前はちゃんと守つてたんだよ。だからんな暗い顔すんな、あいつが心配するぞ？」

「うん、ありがとう……なんだか少し心が軽くなつた気がする」

「礼なんて言うな。小日向が暗い顔してあいつがいつもと違くなつたら、それはそれで面倒くさいだけだ」

「それも自分のため？」

そう聞いてくる小日向の顔にはさつきまでの後悔の痕はなく、いつも立花に向けている微笑みがあつた。

「まあそういうことだ。わかつたならもう礼なんて言うなよ」

「ふふつ、わかつた」

はあ柄にもないことを口にしたせいをつと疲れたぜ……。あー帰つて飯作るのめんどくせー。

「……あなたに響が惹かれるのも、なんとなくわかるな」

「惹かれるつていうか、あいつから抱きつきに來てるんだけどな。あれ小日向から言つてやめさせてくんね？」

「響がやりたいことを止めたくはないけど、善処してあげる」  
互いに距離が縮まつたからか、そんな軽口を言い合つていると——  
突如、警戒を告げるアラートがアタシ達の会話を阻む。  
このアラートが告げるものは一つ。アタシと小日向は意図せずして言葉を合わせ、アラートが知らせる災害の名を呼ぶ。  
——認定特異災害“ノイズ”的名を。

## 王の再誕

ノイズの出現を知らせるアラートが鳴り、アタシと小日向はシェルターと呼ばれる避難区域へと向けて全速力で走っていた。

勢いよく走っているせいで買い物袋の中身がぐちやぐちやになり、時には袋から飛び出してしまったが今は気にしている余裕はない。

「小日向、ここから一番近くのシェルターは!?？」

「あと3km先！」

「3kmか……ちょっと厳しいな」

3kmの道のりをノイズに出くわすことなく辿り着けるのか……一種の運試しだ。ちなみにアタシの今日の星座占いは12位……いやいや、不安になんてならねえよ。たかだか星座占いだ、どうせしょっぱいことぐらいしか当たらないだろ。

と、そんなことを考えて背後を振り返ると……そこにはこちらへと向かってくるノイズの集団が。うん、アタシこれから朝の星座占い信じます。

「小日向、ちょっとヤバイことになつてきたぞ……奴さんの登場だ」

「うそ、あともう少しだつていうのに……」

このままじゃシェルターに辿り着く前に追いつかれるのは明白。二人まとめて仲良く煤へと早変わりつてか……冗談じやねえ！

けど、現状どうしようもないつていうのも事実だ……くそつ、何かいい方法は……。

『なにやらお困りのようですね』

「つて、テメエ！」

「うわっ、なに!?」 いきなり大声出して

あの指輪を嵌めた日から数日経つても現れなかつたにも関わらず、この土壇場で現れたゴエティアに思わず声を上げてしまう。そうだった、こいつの声はアタシにしか聞こえてなかつたんだつけか。驚く小日向へ「なんでもない」と伝え、アタシは頭の中であいつと話を続ける。

(おいつ、ここ数日現れねえと思つたらなんつータイミングで出てきてんだ!)

《むしろナイタイミングと言つてほしいものですね。あなたへ例の魔人のうち一人を連れてきたのですよ?》

(ああ……あの認めさせるとかどうとか言つてたやつか)  
はつきり言つて今はそんなことに時間を割いてる余裕はねえ。て

かなんだつてこのタイミングで……

《あの下等な小蠅を払えるのですよ? むしろこのタイミング以外のなにがあるのです?》

(は……? お前、今なんて

《ですから、あなたを付け狙う下等な小蠅共を始末できると言つたのです》

始末できる? ノイズを?

ゴエティアの言葉に驚愕するがそれは仕方のないことだ。ノイズには位相差障壁というものがあり、こちら側の物理攻撃が一切通用しない。つまり止めることも倒すことも不可能だということだ。

しかしこいつはそんなノイズを“倒せる”と言つたのだ、これを驚愕以外のなにで表せばいいのか。いや驚いている時間はねえ、その魔人と話をつければこの危機を乗り切れるんだ。

(おい、さつさとその魔人と話させる。こちどら一刻一秒を争つてん  
だ)

《まつたく、悪魔使いの荒いお方だ……では少しお待ちを》

そう言い、ゴエティアの声が聞こえなくなつて数秒後

《——汝が我らの次なる王の候補か?》

アタシの頭の中に響いたのは女の声だつた。  
(お前がゴエティアの言う魔人つてやつか)

《ああ、我が名はアイム。序列23番目にして“炎”の権能を持ち  
し魔人である》

アイム——そう名乗る魔人はなんというか口調の硬いやつだった。  
言葉を交わしてすぐにわかつた……こいつちょっと苦手だ。

いやいや、んなこと言つてられる余裕はこつちにはねえんだ。苦手

だろうがなんだろうが、ぱぱつと話をつけてこの危機を乗り越えないと。

(アイム、つったか？ 今かなりピンチでよ、悪いけど力を貸してくれねえか？)

《ならば我に汝の“信念”を見せよ。それが我が仕えるに値するならば力を貸そう》

(はあ！？ こつちはんな悠長なことやつてる場合じやねえんだよ！)

いいから、さつさと、力を、貸せ！)

《ならぬ。我が力を貸すのは我が王と認めた者のみ——さあ、汝が

“信念”を示すがよい》

なにが「信念を示すがよい」だ！ んなもん示してる間にこつちは死顔を晒してつづーの！

くそ、王として認めさせるつてそういうことかよ。てつきり話すだけいいもんかばかり……。

(なあ頼むよ、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけでいいから！ あのノイズを片付けたらすぐに終わるから！)

《汝を狙うあの有象無象をか。確かに我の力を持つてすれば即座に片がつく……が、それでも力を貸す以上は汝が“信念”を示してもらわねばならぬ》

(融通きつかねえなおい！……て待てよ、お前今なんて言つた？ アタシを狙つてる……？)

《なんだ、氣づいておらぬのか。あの有象無象は汝ただ一人を狙つておるのだ、理由まではわからぬがな》

狙いはアタシだと……？ なんで……ノイズは意志に関係なく人間を無作為に襲うはずじや……。

「沢渡さん！ 急に黙り込んだやつたけど大丈夫！？」

「あ、ああ……大丈夫だ」

小日向の声で我に帰るが、それでも頭の中は混乱している。もうわからないことだらけでぐつちゃぐちゃだ。

だがそんな混乱する思考の中、わずかに冷静を保つた部分が一つの答えを導き出す。

(……おい、あのノイズがアタシだけを狙つてるのは本当だな?)  
『ああ、だが見える範囲での人間は殺すようにされているがな……他に聞きたいことはあるか?』

(いや、それが聞ければ十分だ……)

アイムにそう告げると、アタシは並走する小日向へと視線を移し——なにも言わずその腕を掴む。そしてそのままルートを変更、ビルの角を曲がりノイズの視界から身を隠す。

「沢渡さん!?」そつちはシエルターとは別方向だよ!」

「いいから、今はアタシについてきてくれ」

そして何度も建物の角を曲がることでノイズから完全に姿を消す。これで逃げ切れはしないが『時間を稼ぐ』ことはできた。アタシは足を止め、ビルにある非常出入り口の扉を開く。

「沢渡さん、ここに隠れてもノイズからは……きやつ!?!?」

アタシの突飛な行動に目を丸くする小日向を無理やりビルの中へと放り込む。多少手荒になり体勢を崩して倒させてしまうが……命には変えられない。

まだ小日向は倒れているが今は時間が惜しい。

「小日向、アタシを信じてここに隠れていてくれ。絶対に外には出るなよ」

「待って、沢渡さん!? なにする気!?!?」

「小日向——また、明日な」

そう言い、アタシは内側のドアノブを蹴り壊し扉を閉める。そして元来た道を全速力で戻つた——少しでも早く、アタシの姿をノイズたちに見せつけるために。

そして1度目のビルの角を曲がった時、もうすでに近くまでノイズたちは迫つていた。いいじやねえか、有能有能。

「さて、追いかけっこ再開といこうか!」

できるだけ遠く、小日向のいる場所と反対方向へ! 走り出したアタシの後をノイズたちが続き、小日向のいる方へは一体たりとも向かわなかつた。

やはりアイムの言う通り、アタシだけを標的に定めているらしい。

……けどこれで作戦は成功だ。後はアタシの体力が持つかどうか、それだけだ。

『なぜ汝はある少女を逃した？ 追いつかれる危険もあつたというのに……』

走つてゐるアタシにアイムがそう問い合わせてくる。てか逃げてる最中に話しかけてくるんぢやねえよ、集中力切れちまうだろ。

（なぜもなにも、どつちかが確実に生き残れる選択をしただけだ）

『その選択は汝が死ぬことになると同義。なぜ迷うことなくその道を選ぶ』

（どうもこうもねーよ。ただアタシら二人の内、死んで悲しむ奴がいるのが小日向だつただけだ）

あいつが死ねば、間違ひなく立花は悲しむ。小日向は支えるだけだと言つてはいたが……アタシと出会うまでの間、立花があの地獄を生きてこれたのは小日向がいたからだ。あいつにとつて小日向は間違いなくなくてはならない存在だ。

『それがあの少女を逃した理由か？』

（……半分はな。後の半分はただ単純に腹がたつからだ）

『腹が立つ……？』

（ノイズに、あんなわけもわからねえ奴らに二度も立花が大切なものを奪われたらつて考えたら……腹が立つんだよ！）

立花はもう十分苦しんだ。ノイズに襲われたせいで人間親友が作つた地獄と闇に嫌という程飲まれてきた。そのうえ大切な居場所まで失うなどあつてたまるものか。

（アタシの嫌だと思ったことは何が何でもぶち壊す！ たとえ死ぬ目に会おうがそれは変わらねえ！）

『まるで子供のような言い様だな……いや、成長している分より質が悪いか』

（そりやアタシは自己中だからな……文句あるか？）

『いや文句はない……ふふつ』

何やら笑い声が聞こえてくるが……まあいい。とりあえず今は走ることに集中しよう。だんだんと追いつかれてきてはいるが、この分

ならまだ逃げられる。

そしてノイズから逃げ回っている内に日は沈み、月は浮かび星々が煌きだした。

アタシはどこかわからない工場のような場所へと逃げ込むが、もう体力は殆ど残つておらず壁に背を座り込む。そしてすぐに追いついたノイズたちが周囲を囲み、まるで殺すのを焦らすかのようにその場に静止した。

『逃げ場はない……もはやこれまでか』

アイムがなんか言つてやがるが、疲弊した今は返す気力も湧いてこない。だがアタシは近くに転がっていた鉄パイプを手にし、残されたわずかな体力を使って立ち上がる。

『ほう……この絶望的状況の中でも立ち上がるか』

「うつせえ黙つてろ……」

『しかしそれが現実だ。いくら足搔こうが先に待つのは死……その未来だけは変えられぬ』

『だから、黙つてろつて言つてんだろ……！』

先に待つのが死だと、ふざけたことぬかしてんじやねえよ……。自分の未来は自分で決める……誰にもアタシの先を決めさせるかよ！

そしてノイズの群れのうちの中の一体が形状を槍のようなものへと変え襲いかかる。かろうじて避けることができたものの、足がふらつきバランスを崩す。

体に力が入らず足が震える……けど、まだ動ける！

「かかって来いよノイズども——アタシはまだ、生きてるぞっ！」

自分でもどれだけの声で叫んだのかわかつた。もはや叫びというよりも咆哮と呼ぶべきそれはノイズたちの半分が襲いかかる合図となり、私の視界は一面襲い来るノイズで埋め尽くされた。

そんなノイズに後退するどころかむしろ足を前へと進め迎え撃つ。ただじや死なねえ、テメエらの内何体か一緒に地獄に送つてやらあ！

そしてアタシの体がノイズたちに貫かれ煤と化す——その未来を阻んだのは、眼前に壁として広がる『業火』だつた。突如現れた業火にノイズたちは焼かれ、炭化し、煤と化していく。

ノイズすらも焼き尽くす炎に目を奪われていると、その炎を生み出した張本人はアタシへ言葉をかける。

『汝が『信念』見せてもらつた』

「は……？」

アイムの言葉に私が返せるのはその一言だけ。アタシはいつたいどこで『信念』を見せたと言うのだろうか。

アタシがしたのはただの自分がやりたいことをやつただけで、『信念』を見せたところなど一度も……

『その行為こそが『信念』。己という存在を作り上げる『礎』は危機に瀕した時に如実に現れる……そしてそこに人間は『信念』を見せるのだ』

「……えーと、つまり？」

『察しが悪い女だな……つまり汝を王として認めると言つたのだ』

直後、指輪が輝き円陣……というよりも紋章か？ まあ何かわからんが紋章のようなものが映像を投影するかのように現れる。

『我の紋章だ……さあ指輪をかざせ』

「お、おう……」

言われた通り紋章へ指輪をかざす。すると紋章は指輪へと吸い込まれ、ドクン、と指輪が胎動する。

『これで契約は完了した。あとは我が力を顕現するための呪文を授けよう』

「呪文って、もしかして長い？」

『そ、そこの長さはある。だがソロモン王はその呪文で我々を呼び寄せ、力を行使した』

『……あのさ、呪文って短くできないの？ アタシ、いちいち長つたるいの唱えたくないんだけど』

『しかし王が我々の力を行使するには呪文が不可欠で……』

先ほどまでのお堅い態度から一転、どこか困ったような反応を見せ

るアイム。どうやら本当に呪文はなくてはならないものらしい。

でも呪文唱える間にやられたら元も子もないよな……。

「ていうか、だつたらなんで呪文唱えてないのにこの炎出せてるわけ

？」

『それはまだ契約が不十分だつたからだ。契約した以上は汝の許可、つまりは呪文無くして力は発揮できぬ』

「えーめんどくさい……だつたら契約しなかつたほうが良かつたんじや……」

『しなくても良いが、その場合は規模もなにも制御できず……最悪の場合 汝が死ぬまでこの炎を出し続けることになるが?』

うん、契約して良かつた。よしそれじやあ呪文の件に戻ろうか。

「もうさ、アタシが一言何か言うからそれで力を貸してくれない?」

『一言、まあやれるのならやつてみよう』

「よし、決まりだな」

話を終えると同時に、目の前の業火の壁が消滅する。どうやらこれで完全に契約がなされたみたいだ。消えた壁の向こうには未だノイズの姿があり、壁が消えたことで第二波を仕掛けようとしている。アタシはノイズへ向けまっすぐに、拳を握った右手を突き出す。そして大きく息を吸い

「我に従え!  
きやがれ  
23番目の魔人——アイム!」

そう一言、アタシが命じた直後——先ほどの比にならない業火がノイズたちを焼き尽くす。その様はまるで太陽が生まれたかのように明るく、闇であるのに昼間であるのかと疑うほどに強力だった。

そんな予想外の光景に、アタシは呆然と立ち尽くし

「アタシが、やつたのか……?」

自分がやつたのだとわかつていたにも関わらず、思わずそう言葉を漏らしてしまった。

だつてさすがにここまで強力なものが出るとは思つていなかつたし、出るとしてもさつきの炎の壁くらいかと思つていたからさ。

「熱……つ!?!?」

そして不意に右手に感じた熱に視線を落とすと、そこには金の装飾

が施された一振りの短刀が握られていた。

ついさっきまではなかつたはずのそれを観察するように眺めてい  
ると

『おめでとう、沢渡旋！』

突如ゴエティアが歓喜の叫びと共に現れる。なぜに上機嫌かはわ  
からないが、いいことがあつたんだろうと軽く流しておく。

『今この瞬間、貴女は次なる王となつた！』

そんなこんなでアタシは正式に『ソロモンの指輪』の継承者に、そ  
して次なる王とやらになつた。

## 特異災害対策機動部二課

特異災害対策機動部二課、ノイズによる被害に対する対策を担つて  
いる政府機関である。旋や響が通うリディアン音楽院高等科、その校  
舎の地下に設立された本部は現在、慌ただしさの中についた。

「藤堯、状況はどうなつている!」

「はい! 現在ノイズは進路を北東へと向かっています!」

赤いカツターシャツにピンクのネクタイを巻いた筋骨隆々な男、風  
鳴弦十郎。二課の司令官を務める彼の言葉にオペレーターの藤堯  
朔也さくやが機械を操作しながら答える。

弦十郎の視線の先には巨大なモニターが備え付けられており、ノイ  
ズと思われる赤い点が北東へと移動している映像が映し出されてい  
る。弦十郎はそのノイズの動きに対しても視線を鋭くさせ、何か思案す  
るように顎に手を当てる。

ノイズとは意思関係なく人間だけを襲う存在。近くにいる人間を  
感知しそれぞがバラバラに襲いかかるはず……なのだが  
(なんだこの違和感は……)

何かはわからない、だが確実に感じる違和感に弦十郎は自然と眉間に  
皺を寄せる。するとノイズはとある工場にたどり着いたところで  
進行を止め、何事かと弦十郎がモニターを警戒していると

「——つ! 新たな反応パターン検知! それに伴いノイズの数が激  
減しています!」

「なに!?!?」

「しかもこの波形パターン、『アウフヴァウトヘン波形』でもない全く  
未知のものです!」

アラートとともに画面の上に映し出される『unknown』の赤  
文字。弦十郎含め、この場にいるもの全員がその未知の反応パターン  
に目を奪われていると、ノイズを示している赤い点が一瞬にして全て  
消え去つた。

まさに一瞬、瞬きの間に……。

「出現したノイズ消失! それに伴い、謎の存在の反応もロスト!」

「……いま翼はどこにいる!?」

「あと数分で到着します！」

ノイズを一瞬で葬り去る正体不明の力。敵か味方かすらわからないが、コンタクトを取る価値は十分にある。

できることならば味方であることを願いながら、弦十郎はモニターへ向ける視線を細める。

かつてソロモン王に忠誠を誓ったという72の魔人の内の一體、アイムとの契約を完了したアタシこと沢渡旋。

アイムの力を使い、アタシを狙つて襲いかかつてきたノイズを一蹴することができたのだが……。その力はアタシの予想を遥かに超えるもので、眼前に広がる業火はノイズはおろか闇夜すらも焼き尽くしそうな勢いで燃え上がっている。

つて、んな悠長に見てる場合じゃねえ！　早くこの火を消さねえと建物に移っちゃまう！

「おい、この火どうやつたら消せるんだ!?」

『慌てずとも汝が望めば消える』

アイムの言葉に急いで「消えろ」と念じると、言われた通り業火は徐々に勢いをなくしていきついには消え去つた。先ほどまでの大火事のような光景がまるで夢物語のように世界が闇に包まれる。

すると急に身体中の力が抜け、へたり込むようにその場に尻をつく。

「なんで……足に力が……」

『初めての力の行使、故に調節が効かなかつたのだろう。残された

体力を全て炎として放出したのだ』

「あー、そういうことか……どうりで指一本動かすのもだるいわけだ……」

もはや体を起こすのもしんどくなり大の字で仰向けに寝転がる。視界いっぱいに広がる満天の星空を静かに眺めながら、あのビルの中に置いてきた小日向のことを思う。

一応立花との関係上連絡先は交換しているが、スマホの入ったカバンを逃げる際に落としてしまったので無事を伝える手段がない。今もアタシのことを探していなければいいんだが。というか、明日学校行つたら怒られるかな……まあ、怒られるだろうな。んでもって、立花も一緒になつて騒がしくなりそうだ……。

なんて想像をしながらやれやれと溜息を吐いていると、遠くからブゥウン、というエンジン音が聞こえてきた。力を振り絞り顔をエンジン音のへ向けると、ものすごい速さでこちらへ向かってくる一点の光が。

こんな人気のない工場に誰が……。そう考えている間に光はアタシのすぐ近くまでに迫り、ついには数メートル先で停止する。

どうやら光の正体はバイクらしく、ヘッドライトから放たれた光は私の体を闇夜に照らし出す。……つーかマジで眩しい。

『ふむ、これは……』

何やら考え込むような声を出すゴエティア。だが今のアタシにはこいつにかまつていて暇はなく、バイクの持ち主は靴音を鳴らしながらアタシの元へと歩み寄ってきた。

そしてライトによつて照らし出された、バイクの持ち主を見て驚愕する。

「風鳴、先輩……？」

「ええ……先ほどぶりね」

剣のように鋭くしかし、蒼天のように澄んだ瞳。美しくも氣丈な歌姫、風鳴翼の姿がそこにはあつた。

「アンタ、何でこんなとこに……」

「そのことについてはまた後で。それよりも立てる？」

「いや無理つすね。今まつたく体に力が入らないんで」

「そう……」

アタシの返答に静かにつぶやくと、風鳴先輩は後方、ノイズたちの残骸である煤溜まりへと視線を落とす。

なんか色々吟味されてる感が半端ないな……。てか本当にこの人なんでここにいんの？ 学院の有名人でトップアーティストだろ、な

にこんな場所に一人で来てんだよ……。

そんなことを考えていると、風鳴先輩がこっちへ顔を向ける。

やつぱアーティストなだけあつて綺麗な顔立ちしてんな……生で

見ると大違いだわ。

「これはあなたがやつたのね？」

「やつたつて……なにを？」

「別に誤魔化さなくていいわ。あなたがこのノイズ達を始末したんで  
しよう？」

薄々勘付いてはいたが、この人やつぱりなんかあるな。だとすると  
と、放課後アタシに話しかけてきたのも……。

「風鳴先輩、アンタなにを知ってるんすか？」

「それについてはもつと落ち着いた場所で話しましよう」

すると遠くから何台もの車がやってきてアタシと風鳴先輩の周り  
を取り囲む。何か見覚えがある車ばかりだなと思い思考を巡らせて  
いると、あの日ノイズの襲撃後の現場に現れた車とぴたり一致する。

風鳴先輩は車の到着を確認すると、アタシの体を起こし肩で支える  
ようにして持ち上げる。未だ足には力が入らないのでほぼ完全に先  
輩へ体重を預ける形になるが、それでも風鳴先輩は表情一つ変えずに  
アタシの体を支える。

「本当に力が入らないみたいね……なら拘束の必要はないわね」

「は……拘束つて？」

「あなたにはこのまま特異災害対策機動部二課へ同行してもらうわ」

拘束だつたり同行だつたりと、なにやら不穏な言葉を口にする風鳴  
先輩。てか今言つた“特異災害対策機動部”つて、確か政府の機関  
じやなかつたか？ なんでアタシがなんところに……。

そんな疑問は口に出ることなく、アタシは風鳴先輩に車でどこかわ  
からぬ場所へと向かつて連れて行かれたのだつた。

先輩に車で連れられてやつてきたのは、意外にもアタシの通う高校  
である“私立リディアン音楽院高等科”的校舎だつた。そして教師

達のいる中央棟、そこに設けられた特別製のエレベーターに乗せられ下ること数分。

「ようこそ、特異災害対策機動部二課へ！」

アタシを待っていたのは薄暗い刑務所じみた場所でもおどろおどろしい拷問部屋でもなく、まるでパーティーカンパニー会場のように飾り付けられた妙に明るい雰囲気の部屋だった。

中にいる人たちも皆クラッカーを片手に笑顔を浮かべ、とてもじやないがいち政府機関だとはとても思えない。

「初めまして沢渡旋くん。俺はこここの指令を務めている風鳴弦十郎だ、よろしく！」

「は、はあ……」

「そして私がこここの研究者をしている櫻井了子よ、よろしくね♪」

赤のカツターシャツにピンクのネクタイをしたやけにガタイのいいおつさんと、白衣にサングラスという格好をしたグラマラスな女の人が代表をして挨拶をしてくる。

かなりフレンドリーな二人に面食らうが、とりあえずこちらも挨拶を返したほうがいいだろうと自己紹介をする。

「あー……沢渡旋です、よろしくお願ひします」

「うむ。こちらも君も色々聞きたいことがあるだろうし、とりあえず楽にしてくれ」

「あ、はい……」

今は肩を借りずとも立てるようにはなったが、正直に言うとかなりダルかつたので言葉に甘えて近くのソファーアに腰をかける。そして対面におつさんと白衣の女性の二人が腰をかけ、風鳴先輩はソファーには座らず二人の後ろに立つ。

「さて、まず初めに聞いたいのは……あのノイズを倒したのは君で間違いないな？」

「……そうですね」

おっさん——弦十郎さんの問い合わせにアタシは正直に返す。面倒ごとは嫌だが、ここまで来てしまっては隠し事などしても無意味だろう。それにたぶんだがこの人たち、大体のことを知っている気がする。

「指輪（このいっつ）の力でなんとか……見ての通り、慣れないこととしてこのざまですけど」

アタシが指輪を見るように右手を軽くあげると、視線が指輪へと集中する。てか皆視線が怖いって……。もうちょっと穏やかな目で見れないのか……いやアタシが言えたことではないんだけど。

『ソロモンの指輪』……翼の報告通り、君が持っていたのか。……して、君はいつたいそれをどこで?』

「たまたまノイズの襲撃後の現場に通りかかって、そこに落ちてたケースから貰つていきました」

「あはは、堂々としたものいいね……逆に清々しいわ」

「いやまあ、事実ですし」

白衣の女性——櫻井さんは苦笑いを浮かべるが、アタシとしては色々と詮索されるのが面倒なので素直に答えているだけだ。これで法に触れて処分を受けるんだつたらその時はその時だ。

「でもそうだとして、それにしてはおかしな話ね。聖遺物である以上『アウフヴァツヘン波形』が生じるはずなんだけど……」

「あうふ……なんですかそれ?」

『アウフヴァツヘン波形』、聖遺物が起動する際に発せられるエネルギーの特殊パターンよ。あなたの持つ『ソロモンの指輪』も聖遺物だから例に漏れずこの波形を放つはずなんだけど……どういうわけかあなたから感じ取つたのはそれとは別のエネルギーだつたのよねえ……』

よくわからないが、アタシは何かおかしなことをやらかしてしまつたらしい。アタシなりに心当たりがあるとすれば……やはり思い浮かぶのはアイムの存在。

ことを悪化させてしまうかもしれないが、とりあえずアタシは魔人のことを話す。確實にアタシ以上に理解がある人たちだし、色々と知らなかつたことが聞けるチャンスもある。

『7-2の魔人……。それは本当か?』

「はい、現に倒したのはその内の一體に力を借りたからですし」

アタシの話を聞いた弦十郎さんは口元に手を当て、真剣な顔で思考

を巡らせる。まあそりやそうか、『魔人』だなんて架空の存在、アタシだって言われても信じないだろう。

「了子くん、どう思う……？」

「え、ええ……にわかには信じられないけれど、確かに伝承にはソロモン王は神から与えられた指輪を用いて天使や悪魔を使役したとあるわ。そしてソロモン王が使役した悪魔は72人……旋ちゃんの言う魔人の数も72、ぴたり一致するわね」

「これだけ材料が揃つてしまふと信じないわけにはいかないな……。それにしても魔人が本当に実在していたとは」

弦十郎さんも櫻井さんも真剣な表情で、そして深刻そうな聲音で語る。どうやらアタシの話を信じてくれたようだ。

「情報の提供ありがとう。それと聞くが、体の方には異常はないのか？」

「確かに体力と精神力を削るつて言われましたね。現にさつきまで指一本動かすのもしんどかつたですし」

「……なるほど、今のところ以上は無しと。……ああ、こちらばっかり聞いて申し訳ない。旋くんは何か聞きたいことはないか？」

そう言い、弦十郎さんは視線をこちらへ合わせる。聞きたいこと、そう言われてもまずあちらがなにかという事を知らない以上は質問のしようがない。

そして何より、早く帰つて寝たい。体力が戻つてきたとはいえ、疲労が抜けきつているわけではない。先ほどから睡魔が襲つてきて眠くて眠くて仕方がないのだ。

「アタシからはないです……そろそろ帰つて寝たいんですけど、まだ話続きます？」

「いや今日はここまでにしておこうか。また後日、翼を迎えて寄越すからその時に続きをしよう」

あーまたここに来ないといけないわけか……。まあ帰れるんならそれでいいや……今は少しでも早くベッドに横になりたい。  
なんとか眠気と戦つていると、櫻井さんがアタシの横まで移動し頬に右手を添えてくる。

「それじやあちよくなと服、脱いでもらいましょうか♪」

「え、……」

やけに瞳を煌めかせる櫻井さん。

どうやらアタシはまだ、この場から帰してもらえないみたいだ

…。

## 自由のための決意

“ゾロモンの指輪”に宿された魔人アイムの力で、アタシはノイズの危機から何とか乗り越えることができた。

だがそれも束の間のことと、その後現れた風鳴先輩と謎の黒スース軍団に連れられ、アタシはリディアンの地下に連れられ、そこで『特異災害対策起動部二課』なる組織の歓迎を受けることになった。

色々質問されたり、服を脱がされ精密検査みたいなものも受けさせられ、へとへとなりながら解放されたのは、あとわずかで日付が変わったといった時間だった。

部屋についてからは、ようやく落ち着くことができたからか、それまでに溜まっていた疲労がどつと押し寄せ、死んだように眠りについた。

ノイズから全力で逃げ回り、さらには魔人の力を行使したからだろう、今までにないくらい深い眠りについたと自負している。

まだからだろうな。窓から覗く、眩しく照り輝く太陽を見て、アタシは冷静に状況を察した。

「……寝坊した」

朝にいつも目にする太陽と比べて、明らかに高い位置にあるそれから目を逸らし、スマホの画面を確認する。

時刻は午前10時25分。今日は休日でもなければ、都合よく創立記念日であるということもない。単純に大幅な遅刻だ。

しかしあれだ、ここまで盛大に寝坊すると開き直つて慌てることすらしないな。

「教師には適当に謝るとして……問題はこれか」

画面に羅列された不在着信の文字。

かけてきた相手はもちろん立花なのだが、それと同じくらいの数かけてきているのは、以外にも小日向だった。

どうやら無事にあの場をやり過ごすことができたみたいだな。ちょっと安心した。

とはいえ、どんだけかけてきてんだよあいつら。

二人合わせてひーふーみー……25件つて。いつてもまだ午前10時過ぎだぞ？

「今かけなおしても授業中だろうし……まあ、学校で会えばいいだろ」というわけで、リディアンの制服に着替え、遅めの朝食である食パンを1枚袋から取り出し、学校を目指して家を後にした。

ちなみに風呂は検査を受ける前に体を奇麗にしたので問題はない。そう追記しておく。

午前11時、堂々と遅刻をしながらリディアンの校門を通り過ぎ、教室へと向かう中。

「おはよう。随分と遅い登校ね」

開口一発目にそんな挑発じみた発言をぶつけてきたのは、昨日アタシを連行し、遅刻の原因の殆どを作った風鳴先輩だった。

「はよっす。先輩があんなところに連れてかなければ、いつも通り登校できただんすけどね」

「冗談よ。だからそんな殺し屋みたいな目はやめなさい。周りの生徒たちが怖がっているわ」

「あ？ 別にアタシはこれがデフォルトだつての」

朝からよろしくしてくれんじやん、この先輩。

てか、さつさと教室に行きたいんだけど。何しに来たんだこの人。話しだつたら昨日したし……あれか、学校だと一人ボツチなのか？暇だからこうして話しかけてきてんのか？

「何か失礼なことを考えているようだけど、まあいいわ。沢渡 旋さん、貴女にこれからのことについて話に来たの」

「は？ これからのこと？」

「ええ。今日から貴女は特異災害対策機動部二課の保護下に入ることになったわ。よって、今日から放課後は二課の本部にて、貴女の身柄を預からせてもらいます」

「……あ？」

なんて言つた？ 保護下？ んでもつて、放課後は二課で身柄を保護？

おいおい、冗談じやねえぞ。

突然言い渡された保護宣言に動搖するアタシを無視し、風鳴先輩は事務作業のように説明を続ける。

ただ今のアタシの耳には先輩の言葉は入つてこず、胸の奥に確かに苛立ちが募つていった。

「ふざけんな、んなもん “ばいですか” つて、納得できるわけねえだろ」

「……残念だけど、これは決定事項よ。その指輪を身に着けている貴女を、一人にさせることはできないわ」

「だつたら、監視かなんかつければいいだろ。なんだつてわざわざ、んなどこで拘束されなきやなんねえんだ」

こちとら自由に生きるつて決めてんだ。

人気アイドルだか、政府の秘密組織だか知んねーけど、そんながんじがらめごめんだ。

アタシの反論に風鳴先輩は小さく溜息を吐く。

さらには呆れたような目を向けてくる始末で、さらにイライラ度数が高まる。

何でこの先輩、こんな上から目線決めてくれんだ？ たかが年齢が一個上なだけだろ。

「理由は単純、貴女が弱いからよ。外を自由に歩かれて、いつまたノイズに襲われるかわからないわ。いえ、ノイズ以外にも、その指輪を狙う者たちから、貴女は身を守れる？ 偶然その力を手にしただけで、貴女は所詮ただの一般人。危険な荒野で放し飼いよりも、安全な檻の中で過ごす方が平和だと思わない？」

——はい、ertzンしました。

こいつ、好き勝手に言つてくれんじやねえか。弱いだなんだ言つた拳句、ペット扱いかよ。

ふるふると、握りしめた拳が、いや体全身が怒りで震える。

ああ、ここまでコケにされたのは、生まれて初めての経験だ。

「ははつ、言つてくれんじやねえか。アタシが弱いから保護してやる、つてか」

「ええ、それが貴女にとつても、私たちにとつても最善の選択よ。何を反論しようが、変わることのない事実」

「いいや、一つだけあるぜ。アタシがあんたらに強いって思わせれば、保護はしなくていいってことだろ?」

アタシの言葉に、風鳴先輩の視線が刃物のように鋭くなる。

普段はこつちから喧嘩売ることはねえが、ここまでボロカスに言われちゃな。

「そう……なら、今日の放課後に二課へ来てちようだい。そこで貴女の実力を試させてもらうわ」

「いいぜ、目にもの見せてやるよ」

そうして、アタシは先輩の横を通り過ぎ、そのまま教室へと向かう。

『いいですね、なかなかに良いですよ。我が王よ』

(おい、学校では話しかけてくんなつていつただろ)

なぜか嬉しそうにしているゴエティアは、ふんふんと鼻歌交じりに話しかけてきた。

正直まじでうざつたい。

『成長には挫折がつきものです。王が今よりも遥か高みへ上るためにはね』

(まるでアタシが、これから挫折を味わうみたいじやねえか。お前、仮にも従者つてんなら、信じてるの一言ぐらい言えねえのか?)

『ええ、信じていますとも。我が王は必ず、大成する御方であると! ですから、王にはぜひ、今の己を見つめていただきたい』

芝居がかつたような大げさな表現をしてくるゴエティアだつたが、最後の言葉はどこか、いつもの飄々としたものは感じられなかつた。こいつの目的は何なのか、まったくもつて、一ミリたりとも理解はできないが、とにかく今は目の前の勝負に集中するだけだ。

大人相手にだつて、一度も負けたことはねえんだ。何が来たつて叩き潰してやる。

アタシは、自由なんだから……。

「めぐりちゃん！ もうっ、起きてるなら電話かけてよー！ 朝からいないから心配してたのにー！」

休み時間とすることもあり、教室に入るや否や、元気溌剌<sup>はつらつ</sup>猪突猛進な立花が胸に飛び込んでくる。

そのままアタシの体をがつちりとホールドすると、胸に顔をうずめクンカクンカと匂いを嗅ぎだした。

おいこら、抱きつくまではいいが匂いを嗅ぐな。

肩を掴み引きはがそうとするが、立花はいやいやと左右に頭を振つて抵抗してくる。

てかこいつ力強いな。全然離れないんだが。

しかし、立花の反応を見るに、昨日の事は全く知らないらしい。もし仮に知っていたとしたなら、泣き出すくらいのことはあるはずだし。

アタシは立花から視線を外し、少し離れたところに立っている小日向を見る。

どうやら襲われずに無事逃げ切れたらしい。無事だという確証がなかつたため、こうして無事を確認出来てようやく安心できた。

「……響、ちよつと沢渡さん借りてもいい？」

「え？ どうしたの未来？」

「ちよつと一人で話をしたいの。ごめんね？」

小日向しては珍しく、立花に対して静かなトーンで話しかけ、アタシから引きはがす。

そのままアタシの手を取り、教室の外へと引っ張つていった。

小日向が何を思つてこうしているのか理解しているアタシは、特に何も抵抗せず連れられるがままその小さな背中の後を追う。

アタシたちが向かつたのは学校の屋上だつた。

その真ん中付近まで移動をしたところで、小日向は手を離し、数歩程度距離を取る。

だがそこから小日向は何も話すことではなく、しばらく沈黙が続い

た。

何かを言わなければならぬが、言葉の整理がついていない、そんな感じだろうか。

とはいえ、このままずっと互いに黙つたままっていうのも居づらいものがあるので、アタシの方から先に口を開く。

「あー……小日向、無事でよかつた。どつか怪我とかないか？」

無言。

「そういうや、膝擦り剥いてんな。悪かつた、乱暴に投げちまつてよ」  
無言。いや、わずかに体が震えている。

「……なんで」

震えは握りしめた拳から全身へと移つていき、振り絞るかのようになか細い声が漏れる。

「なんで、沢渡さんが謝るの……」

怒り、悲しみ、安堵、後悔。

そんな様々な感情が入り混じった表情を浮かべる小日向。その頬には、一筋の零が流れていた。

「なんで、あんなことしたの……っ！ もしかしたら、沢渡さんが死んでたかもしれないんだよ！」

今度はか細い声ではない。悲痛に濡れた表情での、あらん限りの叫び。

頬をなぞる一筋の道は、溢れ出した零に？まれ、滝のように流れる。

なんで……まあ、そう思うだろう。

本来なら死んでもおかしくはなく、アタシは偶然、ノイズを払いのける力があつたから助かつただけだ。

事情を知らない小日向からしてみれば、アタシが死ぬつもりで囮になつたと思うだろう。優しいこいつのことだ、アタシの勝手な判断を自責の念に苛まれたに違いない。

「……私、怖かったの。沢渡さんが、もう戻つてこないんじやないかって」

「……ああ」

「もし、死んじやつてたらどうしようつて、沢渡さんを見るまでずっと

「考えた」

小日向が一步、また一步と近づいてくる。

そして目の前に来ると、アタシの背中へ両手を回してきた。先ほど立花とは違い、ガラス細工に触れるかのような優しい抱擁。

「本当に……生きててくれて、よかつた……」

震えている。声も、体も。

ああそうか、こんなアタシにもいたんだな……悲しんでくれるやツつてのが。

「悪かつたな、心配かけて」

「ううん、戻つてきててくれたから、もう大丈夫」

抱きしめる手を離し、顔を上げた小日向の目元には確かに涙の跡があつた。

だが先ほどのような陰りはなく、満開の笑顔だけがそこにある。「それとこの話、立花に内緒にしてくれただろ？ サンキューな」響が聞いたら、無茶してでも探そうとするから。だから、もうこんなこと、絶対にしないでね

「ああ、そうだな……善処するよ」

「むつ……そこは『わかった』つて言つてよ」

頬を膨らませ、上目づかいで睨んでくる小日向。

本人は怒っているつもりだろうが、ただただ可愛らしいだけだ。アタシはその小さな頭に手を伸ばし、子供をあやすように優しく撫でる。

絶対にしないつて約束は、はつきり言つてできない。

もし仮に、また同じ場面に出くわしたなら、きっと……いや、絶対にアタシは同じことをするだろう。

今のアタシなら、そうした方が生き残る確率は高いから。「また同じ目にあつた時は、そん時はアタシが守つてやるよ」

「もう、だからそれをやめてつて言つてるのに……」

アタシの返答に、小日向は不満そうな表情を浮かべる。

そんな視線を遮るように、今度は強めにわしゃわしゃと撫でる。

『——理由は単純、貴女が弱いからよ』

思い出すのは、風鳴先輩の言葉。

……あの時は煽りに煽ってくれたおかげで冷静さを欠いていたが、今考えるとあの言葉はもつともだ。

力を手にしてまだ一日。満足に使いこなすこともできないで、同じ状況になつた時、アタシはともかく、立花や小日向を守り切れることができるのか。

……ああ、そうだな。天災認めるのは癪だが、絶対に守り切れるとは言えない。あの理不尽なノイズたちから、アタシが大切だと思えることつらを。

あーあ、こんな気持ち何時ぶりだ？ やっぱ気分いいもんじやねえな、自分が弱いって認めるのは。

まあ、今のアタシにはいい薬だろう。

一般人レベルで胡坐かいてた、御山の大将だったアタシには。

「…………ありがとう、小日向」

「ん？ ありがとうって、なにが……？」

唐突な感謝の言葉に目を丸くする小日向。

だが、こいつのおかげで見つめなおすことができた。

んでもつて決めた。アタシが自由に生きるため、そしていざという時こいつらを守るため。

「ねえ、なにがあるがどうなの？ 沢渡さん？」

「いや、なんでもない、気にすんな。さつてと、教室に戻るぞ。まだ先生に会つてないから、アタシの遅刻は更新されっぱなしだ」

「えつ、ちょっと待つてよ、沢渡さん！」

納得のいかない小日向が後についてくるが、これ以上は話すつもりはないので適当にはぐらかす。

さてさて、放課後に会う先輩たちがどんな表情するのか……今日の楽しみが増えたな。

## 現在地

小日向と屋上で話をした後、教室へ戻ったアタシは、大幅の遅刻をしたため教師からそれなりに長い説教を受けた。

まあ怒られるのはわかっていたし、理由もほとんどが自分の落ち度でもあつたから、特に反抗することなく説教をくらつたわけだが。そんなこんなで時間は放課後。風鳴先輩と約束をした時刻である。

小日向たちと早めに別れを済ませ、アタシは一人リディアンの中央棟へと向かう。すると先に来ていたらしい風鳴先輩が、壁に背中をつけ腕組みをしてアタシを待っていた。

こちらの存在に気付いた先輩は、壁から離れるとゆっくりとした歩調で近づいてくる。

「ちやんて来てくれたみたいね。よかつたわ」

「まあ、一応約束つすからね。それに、舐められたままじゃ終わらないんで」

「そう、覚悟はできているみたいね。それじや、行きましょうか」

風鳴先輩の後に続き、昨日乗つたばかりの隠しエレベーターに乗り込むと、ものすごい勢いで急下降する。

二課の本部に着くまでにそれなりに時間がかかるため、移動の時間はなんとも氣まずい空気が流れている。

風鳴先輩は壁に寄りかかり、エレベーターのガラスから見える外の光景を黙つて見つめている。

流石は話題のアーティストというべきか、そんな姿も様になつており、ファンでもある立花に今の先輩の写真を送つたら狂喜乱舞するだろう。

なんて時間つぶしにどうでもいいことを考えていると、不意に先輩が口を開く。

「沢渡さん、体の方に異常はないかしら？」

「ん？ いや、特に異常つてのはないっすね。いつも通り、元気8割気だるさ2割つてとこつすか」

「体調の割合までは聞いてないけれど……そう、異常はないのね」

風鳴先輩のいつもの気難しそうな表情が少し崩れ、わずかに安堵の  
ような感情が見える。

どうやら心配してくれているみたいだが、いつたいどういう風の吹  
き回しなんだろうか。

「急にどうしたんすか？ なにか変なものでも食いました？」

「……あなたには確かにいろいろと厳しいことを言つたけれど、そこ  
まで印象が最悪なのかしら？」

「まあ、今のアタシの好感度で言うと……聞きたいつすか？」

「いえ、遠慮しておくわ。そういう言葉の後に続く数字は、大抵よくな  
いってわかっているから」

そう言いながら、ふいつ、とそつぽを向く先輩。

……なんだその動き。可愛いかよ。

アーティストの一面や学校でのクールな先輩しか知らないから、そ  
んな先輩の意外な行動に不覚にもときめきかけてしまう。

「私たちの過失で貴女が手にしてしまったのだから気にもするわ。そ  
れに、その力はまだ謎に満ちている。もし仮に貴女の身に何かあれ  
ば、その責任は当然私たちにある」

「責任つて言つても、勝手に持ち帰つて勝手に嵌めたのはアタシだか  
ら、そこまで気にしなくてもいいですよ」

「……ありがとう。でも、それはいかないわ。その力然り、ノイズ然  
り、これから貴女には少なくない不条理が襲い掛かってくる。その火  
の粉から貴女を守るのは、私たちの義務よ」

風鳴先輩の表情がわずかながら陰る。

確かにこの指輪を見失つてしまつたのは彼女たちの責任だろう。

だが、アタシがこんな風になつてているのは紛れもない自業自得だ。

だからそんな風に罪悪感や後悔を持たれてしまつては、アタシとし  
ても気分がよくない。

「そこにどういう経緯があるうと、それは私たちがやらなければなら  
ないこと。貴女の想いもわかるけれど、そこは譲れないわ」

廊下でのあの言葉も、アタシを守るための100%の善意で言つた  
ものだろう。小日向と話し、冷静になつた今ならはつきりとわかる。

ただそれにして……風鳴先輩、あんた不器用すぎだつて。わざわざ憎まれ役を買って出るような言い方してよ。

「だから、貴女には悪いけれど手は抜かないわよ」

「むしろ手え抜いたりなんかしたら、逆に殴り飛ばしてやりますよ」

「そう……なら楽しみにしておくわ」

先輩が小さく笑うと同時に、到着を告げるブザー音が鳴る。

なんやかんや先輩と距離を縮めた（？）アタシは、開かれた扉を抜け、本部へと向けて足を進めた。

「話は翼から聞かせてもらつた。旋君が勝てば、これまで通りの生活をするでいいんだな？」

「まあ、そうつすね。なんか無茶言つてすんません」

「気にするな！　子供の我儘くらい、笑い飛ばしてやるのが大人つてもんだ！」

「むしろ大人なら、喧嘩は止めるべきなんじやないんすか？」

「それは尤もだが、それだと君が納得はしないだろう？　なに、喧嘩程度なら止めやしない。もし仮にそれ以上になろうつていうなら、その時はきつちり諫めるさ」

本部に着き、弦十郎さんと今回の件について話をすると、以外にも止めるような言葉はなかつた。

むしろ「思いつきりぶつかつてこい」と言わんばかりに快活な笑みを浮かべられたほどだ。

なんというか、今まで会つてきた大人達とは明らかに違うよなこの人。体格つていうのもそうだけど、なんていうか、発する言葉一つ一つに安心感があるつていうか。

「場所はちゃんと用意してあるから、好きに暴れても構わないぞ」

「うす、それじゃ思う存分暴れさせてもらいます」

弦十郎さんに見送られ、アタシは小川さんというスースツ姿の優男に連れられ、先輩が待つ部屋へと向かう。

「……」です。それでは、くれぐれも無茶はしないでくださいね？」

案内された扉を抜けると、そこは東京ドームかと見間違うほど広い空間だった。

その空間の真ん中では、先輩が両眼を閉じ精神統一をして待つていた。

「……準備はいいかしら？」

「そつすね、いつでもどうぞ」

「そう、そしたら始めましょう」

言い終わると同時に、先輩の雰囲気が一変する。

これまでも鋭さというか、普通じゃない雰囲気をしていたが、今はさらに研ぎ澄まされたような……例えるなら鍛え抜いた日本刀のような雰囲気を纏っている。

初めて感じるその空気に、わずかだが握りしめた拳が震える。

「来ないのなら、こちらから行かせてもらう！」

叫び、一步を踏み出す先輩——つて速!?

瞬く間に距離を詰めてきた先輩は、右掌を突き出し掌底を食らわせてくる。予想外の速度に驚いたが何とか反応し、両腕をクロスすることで直撃だけは回避する。

しかし腕に走る衝撃はそれなりのもので、防いだにもかかわらず吹き飛ばされてしまった。

「くっ!! いつてえ！」

まじで何もんだよあの人！ 吹き飛ばされるなんて早々ねえぞ!?

腕のダメージに表情が歪んでいるのを感じつつも、すぐに立ち上がり先輩へ目を向ける。

だがそこにはすでにその姿はなく

「どこを見ているの？ こっちよ」

「うぐっ!？」

背後から聞こえてきた声に振り返ろうとするも、その前に再び掌底を喰らってしまいまたも吹き飛ばされる。

しかも今度はモロに貰ってしまい、肺の空気が一気に外へ吐き出さ

れた。

「がほつ、ごほつ……くつそ、めちゃくちゃだな……！」

明らかにこれまで相手にしてきた奴らとは違う。一線を画すとか、頭一つ抜けているとかそういうレベルじやない。まさに次元が違う。そりや、アタシの提案にも乗ってくるわけだ。アタシ相手なら、万に一つでも負ける可能性がないってわけか……。

「これが、貴女にこれから襲い掛かるかもしれないものよ。ただの一般人の喧嘩ではない、本物の戦い」

まるで教え子に説く教師のような口調で話しかけてくる。

「これだけじゃない。その他にも多くの脅威が貴女を狙つてくるわ」「立ち上がり、話を続ける先輩へ殴り掛かる。

だがそれも紙一重の距離で躱され、カウンターで腹部に掌底を喰らう。

「それだけじゃない。もしかしたら貴女の身の周りの人々にまで、その魔の手が伸びるかも知れない」

どれだけ拳を振るおうが、蹴りをお見舞いしようが、尽くが躱され反撃を返されてしまう。

「事はもう、貴女一人だけで収まるものじゃなくなっているの。それは沢渡さん、貴女もわかっているでしよう？」

……ああ、わかっている。アタシが狙われている立場だつていうのは。

指輪を手にしてすぐにノイズに襲われたことが、それを立証する何よりの証拠だ。

これからアタシは、ああしたことに巻き込まれていくんだろう。そうすれば無論、一緒にいる立花や小日向、そしてその他の無関係な奴らも巻き添えを喰らう。

アタシが安易にこの指輪を嵌めたせいで、死ななくていいやつらまで死んじまうかもしない。

「わかってるよ、んなことは……」

どこまでいっても、アタシはただの学生だ。

ただ喧嘩がちょっと強えだけの非力な人間だ。

「今のアタシじや理不尽に押しつぶされるだけだつて、そんなもんとつくにわかつてゐる」

風鳴先輩は何も言わず、何も動かない。

ただ黙つて、アタシの言葉の続きを耳を向けている。

「けどな、朝も言つたが、『はいそうですか』つて、黙つて理不尽に背中向けて、籠ん中で守つてもらつて納得するほど、アタシは物分かりはよくねえんだ」

「そうね……それなら、どうするつもり？」

瞳を伏せ、静かに問いかけてくる。

その問い合わせに対する答えはもう決まつてゐる。あの時、屋上で決めてきたから。

「アタシが弱いせいだつていうんなら、そいつらを返り討ちにできるまで強くなつてやる！ そうすりや、あんたも文句はねえだろ？」

「……貴女のことだから、そう言うと思っていたわ。でも、強くなるつていつても具体的にはどうするのかしら？ 精神論だけじゃ強くはなれないわよ」

「んなこと言ひませんつて。それに強くなるつてんなら、ちようどいい場所があるじゃないですか。なあ、弦十郎さん？」

先輩の問い合わせに対し、アタシは弦十郎さんの名を叫ぶと、設置されている監視カメラの一つに顔を向ける。

レンズ越しに視線が重なつたのを感じ

「アタシも『特異災害対策機動部』の一員してくれ。んでもつて、戦えるよう強くしてくれ」

これがアタシが自由に生きるために決めた道。

この組織ならノイズやら指輪の事やらも知つてゐるだらうし、何より先輩をここまで鍛えたノウハウもある。

アタシが強くなるために必要なものが、この場所には全て揃つていると言つても過言ではない。

「この指輪の力なら、ノイズだらうと消し飛ばせる。対ノイズの戦力として、アタシを育てるのは悪くない話だろ？」

『確かにそれはそうだが……旋君、その言葉の意味を分かつてゐるの

か?』

スピーカーから聞こえてくる弦十郎さんの声は真剣そのもの。

そもそものはず、アタシが言つた提案はノイズと戦うため戦力になると同義だから。

我が事ながら危険な道へと進んでいるなとは思つてゐるが、だがこれがアタシが自由に生きるため、立花や小日向を守るための最善の道。

「アタシは本気だ。それにどのみち、ここで保護されることを選んでも、結局アタシは死んでいるも同然なんだよ。ならせめて、後悔のない道を進ませてくれ」

『……それは君の思つて いる何倍も、 苦しく険しい道になるぞ』

「知つて いる。 それも承知の上だ」

『……なら、俺からは何も言うことはない。 だが、後で話はさせてもら うぞ』

そう言ふと、スピーカーから声は聞こえてこなくなる。

言いたいことを言つたアタシは、蚊帳の外にしてしまつていた先輩へと意識を向ける。

先輩の表情は驚き半分呆れ半分といったもので、先ほどまでの刃のような空氣は霧散して いた。

「もうちよつと驚いてくれると思つたんですけど、意外と落ち着いてますね」

「ちやんと驚いて いるから安心して。 ただ、貴女なら そう言ふだろ うつて、納得して いる自分がいるの」

「そつすか。 なんかこんな短期間で、 自分のことがわかられると微妙ですね」

そこまでわかりやすいような性格はしてないと思うんだが……。

まあいいか、そんなことよりも最後にやつておかなきやなんねえこともあるし、

「風鳴先輩、これから今のアタシの全力をぶつけます」

「指輪の力か……なら、私も相応の力で受け止めるわね」

「……言つておいてなんですが、結構やばいかもしけないっすよ?」

火傷とかじやすまないかもしれないし」

「大丈夫だから、安心してぶつけてきなさい」

そう言うと、先輩は首から下げるペンダントを右手で握りしめる。

なにやら先輩も先輩で秘密癖があるらしい。それなら、遠慮なしでぶつ放させてもらうとしよう。

(準備はいいか、アイム)

『無論だ。むしろ遅すぎるくらいだつたぞ』

アイムの方もどうやら準備は万端のようだ。

そしたらいつちよやつてやるか！

右手を前にかざし、指輪に秘められた力を開放する呪文を唱える。  
「我に従え！ 23番目の魔人——アイム！」

瞬間、指輪から溢れ出した光が視界を包む。

そして次に視界が晴れた時、アタシの右手には金の装飾が施された短剣が握られていた。

『さあ王よ！ 汝の力、我に預けよ！』

「行きますよ、先輩！」

「ああっ、来い！」

体の中から短剣へと何かが流れしていく感覚が走る。

それに比例し、短剣に描かれた紋章が淡い光を帯び始め

「いつけええええ！」

縦一文字に振り下ろすと、紅蓮を纏つた一撃が先輩へと襲い掛かる。

迫りくる烈火の斬撃を前に、先輩は動じることなく目を瞑り

「I myuteus amenohabakiri tron——」

静かな、それでいて凜とした声が室内に響きわたる。

直後、青い光が炎と衝突し拮抗する。光と炎は互いを押し切らんとするが、どちらも一步も譲ることなく火花を散らす。

そして遂には決着がつかず、爆発という形で対消滅を起こした。

視界が煙で奪われる中、それを真つ二つに切り裂き一つの影が姿を見せる。

そこには先ほどまでのリディアンの制服ではなく、白を基調とし、所々に青い装甲を身に着けた姿へと変わっていた。

「やはり力の扱いに慣れていないようだけど、いい一撃だつたわ」

「はっ、余裕そうな顔して言われても嬉しくないっすよ」

やつぱりスゲーなこの人。やっぱ、今のアタシじや逆立ちしてもかなわねえや。

んでもって、アタシの力も再確認できた。指輪の力を使ってもこれが今アタシの限界。ここが、今アタシの現在地。

ここからだ、ここからアタシはもつともっと強くなつてやる。自由のため、あいつらのために！

——こうして、アタシは日常に別れを告げ、非日常へと足を踏み入れた。